損保ジャパン日本興亜福祉財団叢書　　№94

「ジェロントロジー研究会」報告書

（認知症などの）要介護高齢者の就労とＱＯＬ
～ frailな高齢者の社会とかかわり方を考える～

ジェロントロジー研究会
主査　　秋山　弘子
東京大学　名誉教授
一般社団法人高齢社会共創センター　センター長

2019年8月

公益財団法人　損保ジャパン日本興亜福祉財団

まえがき

本叢書は、(公財) 損保ジャパン日本興亜福祉財団に設置された「ジェロントロジー研究会」の 2 冊目の叢書となります。「ジェロントロジー研究会」は、1998 年に設置された社会老年学研究所を引き継ぎ、2015 年に発足しました。高齢者や高齢社会をめぐる諸問題を明確にし、その解決に向けての研究を通じて、豊かな長寿社会の発展に貢献することを目的としています。

第一次の研究テーマは、「世代間ギャップからみたシニア就労の現状と課題～ダイバーシティ雇用環境の実現にむけて～」と題し、日本の生産人口の減少を補うための人材源としてシニア就労者に着目し、シニア就労者の可能性について研究しまとめました。

第二次の研究テーマは、「(認知症などの) 要介護高齢者の就労とＱＯＬ～ frail な高齢者の社会とかかわり方を考える～」と題し、サービス付き高齢者向け住宅を運営する組織、そこに居住する方々の協力を得て、現時点におけるサービス付き高齢者向け住宅の課題と目指すべき姿について言及しています。

叢書刊行に際しては、研究会メンバーの先生方のほか、2 名の方にインタビュー調査・報告書作成にご協力いただきました。8 つのサービス付き高齢者向け住宅の運営者･職員の方および居住者の方に、長時間に亘りお話を聞かせていただきました。ここに改めて深くお礼申し上げます。また、サービス付き高齢者向け住宅調査データを提供いただきました一般財団法人高齢者住宅財団の皆さまにも感謝申し上げます。

2019 年 8 月

公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

ジェロントロジー研究会メンバー（敬称略）

主　　査：秋山　弘子
東京大学　名誉教授
一般社団法人高齢社会共創センター　センター長

主　　幹：片桐　恵子
神戸大学大学院人間発達環境学研究科　教授
アクティブエイジング研究センター　センター長

委　　員：白瀬　由美香
一橋大学大学院社会学研究科　教授

委　　員：グライナー　智恵子
神戸大学生命・医学系保健学域大学院保健学研究科　教授

研究協力者：渋川　勉
東京大学高齢社会総合研究機構　特任研究員
竹内　真純
東京大学先端科学技術研究センター　学術支援専門職員

（所属・役職は 2019 年 4 月時点）

事務局：公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

目　　次

第１章 はじめに：研究の目的 …… 5

第２章　サービス付き高齢者向け住宅の現状 …… 7

1. サービス付き高齢者向け住宅とは …… 7

2. サービス付き高齢者向け住宅の特徴 …… 8

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅の最新状況 …… 8

＜２＞入居者のウェルビーイングや社会参加に関わる取り組み状況 …… 9

3. まとめ …… 14

第３章　研究概要 …… 17

1. 方法と目的 …… 17

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅運営側インタビュー調査 …… 17

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅居住者インタビュー調査 …… 18

＜３＞高齢者住宅財団調査の二次分析 …… 18

2. インタビュー対象サービス付き高齢者向け住宅の概要 …… 19

3. サービス付き高齢者向け住宅運営側のインタビュー …… 27

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅各論 …… 27

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅運営側インタビューのまとめ …… 45

4. サービス付き高齢者向け住宅居住者側インタビュー …… 48

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅各論 …… 48

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅居住者側インタビューのまとめ …… 63

第４章　活動支援の効果について …… 67

1. 分析対象データ …… 67

2. 結果 …… 67

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅の特徴 …… 67

＜２＞入居者の特徴 …… 75

＜３＞健康の増進にプラスの影響がある要因の検討 …… 76

第５章　まとめと提言 …… 79

第 1 章　はじめに：研究の目的

近年日本においては、高齢者のみ世帯、特に一人暮らし高齢者の増加が顕著である。1980 年には高齢世帯のうち一人暮らし高齢者の割合は10.7％であったが、1990 年には 14.9％、2000 年 19.7％、2010 年 24.2％、2015 年には 26.3％、2016 年には 27.1％となっている（平成 30 年高齢社会白書）。一人暮らし高齢者は安全面や防災、社会的孤立のリスクなどが高く、様々な問題が生じうる。

よって、本研究会では自宅に自立して居住するのは難しい、あるいは一人で暮らすのは少々心配な高齢者が安心して住むことができる住宅として、サービス付き高齢者向け住宅（以下「サ高住」）に着目した。

サ高住は 2011 年に始まった新しい仕組みであり、サ高住で暮らす高齢者の日常生活や健康などに与える影響などが十分に明らかにされているとは言えない。よって本研究会では、以下の 2 つのことを目的として研究を行うこととした。

目的の 1 つ目は、従来の高齢者施設とは異なる新しい住宅環境で高齢者がどのような生活をしているのか、そこでの生活に満足しているのか、不満な点があるとしたらどのような点なのかを明らかにすること。

目的の 2 つ目は、サ高住の運営側が居住高齢者の社会参加や社会的役割を維持するような仕組みに取り組んでいるのか、あるとすれば、そのような取り組みを提供しているサ高住と、基礎的なサービスのみを提供しているサ高住で、高齢者の心身の健康に何か違いが見られるのかを明らかにすることを目的とした。

（片桐　恵子）

第２章　サービス付き高齢者向け住宅の現状

1. サービス付き高齢者向け住宅とは

サービス付き高齢者向け住宅は、2011 年（平成 23 年）に国土交通省と厚生労働省によって制定された「高齢者の居住の安定確保に関する法律（高齢者住まい法）」にもとづいて建設される住宅のことである。それ以前の高齢者向けの住宅には、「高齢者専用賃貸住宅（高専賃）」「高齢者円滑入居賃貸住宅（高円賃）」「高齢者向け優良賃貸住宅（高優賃）」などがあったが、この法律改正によって「サービス付き高齢者向け住宅」という名称に統一された。サービス付き高齢者向け住宅は「サ高住」や「サ付き住宅」などとも呼ばれている。

サ高住には、一定の質やサービスを保つための登録基準が設けられている。第一に、各部屋の床面積が原則として 25 ㎡以上あること、キッチン、水洗便所、収納設備、洗面設備、浴室を備えていること、バリアフリー構造であることとされている。ただし、共同利用するのに十分な食堂、台所、浴室等の設備を備えている場合には、面積は 18 ㎡以上で良いこととなっている。第二に、安否確認と生活相談サービスを提供することが必須とされている。医療・介護・福祉関連資格を持つケアの専門家が、少なくとも日中は建物に常駐して、2 つの必須サービスにあたることとなっている。第三に、高齢者の居住の安定が図られた契約で、前払家賃等の返還ルールおよび保全措置が講じられていることである。高齢者の場合は長期入院などを理由として、一方的に契約を解除される懸念もあるが、それを防ぐためのルールを定めている。以上 3 つの基準を満たした場合には、都道府県、政令市、中核市にサ高住として登録を行うことができる。

また、入居契約に関して、提供するサービス等の登録事項の情報を開示すること、入居者に対する契約前の説明を行うこと、誇大広告の禁止が事業者に義務付けられている。そして、住宅管理やサービスにおいてこれらが守られていない場合は、報告徴収や立ち入り検査、指示など、行政の指導監督が行われる。その代わり、サ高住の供給促進のため、国は建設費の 1/10、改修費の 1/3 等の補助金を出したり、固定資産税や不動産取得税の税制優遇をしたり、住宅金融支援機構を通じた建設資金の融資をするなどの支援もしている。

2019 年 1 月末時点でサ高住は、全国に 7230 棟、239,865 戸が建設されている。都道府県別では、大阪府が 675 棟、26317 戸でひときわ多い。続くのが北海道で 466 棟、19082 戸である。それ以外では埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、兵庫県で 300 棟、1 万戸を超えている。どちらかと言えば、大都市のある人口の多い都道府県で棟数、戸数ともに多い（サービス付き高齢者向け住宅情報提供システム，2019）。

2. サービス付き高齢者向け住宅の特徴

サ高住はすべてが登録基準にもとづいて開設されているものの、運営形態には多様性が大きい。ここではまずサ高住情報提供システムによる集計結果にもとづいて概要を把握する。次に、野村総合研究所が厚生労働省老人保健事業の一環で行った、より詳細な調査結果をもとに、入居者のウェルビーイングや社会参加にかかわる取り組み状況を見ていく。

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅の最新状況

住宅情報提供システムは、ホームページにおいて公表している全国の登録情報データの集計結果を定期的に公開している。以下は、最新版である2018年8月末現在の集計結果をもとにした概要である。その時点で登録されていた住宅数は7110棟であった。

法人の種別では、株式会社（60.5％）、医療法人（13.0％）、有限会社（8.8％）、NPO法人（3.0％）などがある。主な業種としては、介護系事業者が69.7％で、医療系事業者が14.1％であるように、介護・医療関係の業種による住宅が圧倒的に多い。それ以外では、不動産業者7.5％、建設業者2.0％などとなっている。

住戸数は全体の過半数が30戸未満である。「10戸以上20戸未満」が19.0％、「20戸以上30戸未満」が26.7％、「30戸以上40戸未満」が20.5％であった。住宅階数は、2階建が40.2％、3階建が25.1％であり、3階以下の住宅が全体の7割強を占めていた。

専用部分の床面積には基準が定められているが、25㎡以上は約2割に過ぎず、約4分の3が25㎡未満である。設備について便所、洗面、収納はほぼすべてにあるが、台所や浴室があるのは約2割である。他方、バリアフリーについてはすべての建物が満たしている。2階建て以上の建物では約9割がエレベーターを備えている。入居契約は約9割が「賃貸借契約」としている。

状況把握（安否確認）、生活相談の必須サービスの実施状況は100％であった。食事サービスの提供は96.9％、介護サービスは48.3％であった。なお、有料老人ホームなどと同様に介護保険制度による特定施設入居者生活介護等の指定を受けている住宅は7.1％に過ぎなかった。

住宅に常駐するスタッフの資格を複数回答で調べたところ、介護初任者養成研究修了者が67.8％、介護福祉士が65.9％、看護師が23.4％、介護支援専門員（ケアマネ）が20.0％であった。日中以外は常駐スタッフがいない住宅は22.0％あった。

サ高住に併設される高齢者居宅支援事業に関しては、約4分の3の住宅には何らかの事業が併設されていた。最も多いのが通所介護事業所で44.9％、それに次ぐのは訪問介護事業所41.2％、居宅介護支援事業所26.8％であった。

＜２＞入居者のウェルビーイングや社会参加に関わる取り組み状況

○調査の概要

野村総合研究所は、2014～2017年度（平成26年度～平成29年度）にかけて、老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）を通じて、高齢者向け住まいの運営実態や入居者像、医療・介護サービスの利用状況などの実態把握・分析を行ってきた。基礎的情報の定点観測や変化を把握するほか、各年度で特定のテーマを設定した分析もなされている。とりわけ2017年度には、入居者の生活の質を高めることに関連する取り組みの実施状況について調査が行われた。

調査対象は1年以上の運営実績があるサ高住として、2016年7月1日時点で登録されている住宅5576ヶ所のうち、75％である4182ヶ所に調査票を送付した。そのうち1896ヶ所から回答が得られ、有効回答率は45.3％であった。調査は2017年9月～10月に行われた。なお、この調査では、ほぼ同様の内容の質問紙調査を有料老人ホームに対しても実施しており、サ高住の調査結果との比較も行われている。

回答があったサ高住1896ヶ所のうち、特定施設の指定を受けているところは130ヶ所、そうでないところ（非特定施設）が1766ヶ所であった。以下では、主として非特定施設にかかる入居者の生活の質を高めるための取り組みの結果を示し、必要に応じて特定施設や有料老人ホームとの違いに言及する。

○自立支援／入居者主体等の生活・ケアの取り組み

生活の質を高めるための取り組みの1つとして、この調査では「自立支援／入居者主体等の生活・ケアのための取り組み」を次の4つの系統に分けて分析が行われた。

・予防トレーニング系：筋力トレーニング、歩行訓練、認知症予防
・主体的機会づくり系：入居者企画イベント、入居者企画サークル、家事を主体的に行う
・基礎的管理系：水分管理、栄養管理、口腔ケア
・ケアからの自立系：減薬、排泄自立、経口摂取

上記の取り組みに「取り組んでいる」「特に力を入れて取り組んでいる」を合わせた割合が高かったのは、「施設内でのイベントの開催」「水分摂取の管理」「栄養・食事の管理」「口腔ケア」であった（表1）。サ高住（非特定施設）では、基礎的管理系の取り組みについて、特に力を入れている割合が高かった。けれども押しなべて見ると、「特に力を入れて取り組んでいる」項目は「なし」とする住宅が7割以上を占めている。

日中の職員数と特に力を入れている取り組みの関係を見ると、予防トレーニング系と基礎管理系は職員数が多いほど力を入れている割合が高い。他方、有料老人ホームの場合は予防トレーニング系を除いて職員数が多いほど取り組み状況が

高い傾向はみられなかった。外部事業者との連携がある場合には、とりわけ主体的機会づくり系とケアからの自立系において、特に力を入れている取り組みのある割合が高い。サ高住（非特定施設）では、有料老人ホームと比べて、外部事業者との連携がある場合とない場合との差が大きいという特徴があった（表２）。

表１　自立支援／入居者主導の生活・ケアのための取り組み状況（%）

サービス付（非特）			取り組んでいない	取り組んでいる	特に力を入れて取り組んでいる	無回答	全体
割合	筋力の維持・向上のためのトレーニング等	N=1,766	49.2	40.5	5.5	4.7	100.0
	歩行訓練	N=1,766	54.6	36.5	4.1	4.7	100.0
	認知症予防のためのプログラム	N=1,766	61.4	30.5	2.9	5.2	100.0
	施設内でのイベントの開催	N=1,766	15.4	66.3	14.9	3.3	100.0
	入居者の企画・運営によるイベントの開催	N=1,766	76.3	16.9	2.2	4.5	100.0
	施設内でのサークル活動等	N=1,766	69.6	18.3	7.8	4.2	100.0
	入居者の企画・運営によるサークル活動等	N=1,766	82.9	11.7	0.8	4.6	100.0
	家事等を主体的に行う機会の提供	N=1,766	70.0	23.9	1.4	4.7	100.0
	水分摂取の管理	N=1,766	27.5	56.0	13.4	3.2	100.0
	栄養・食事の管理	N=1,766	22.3	61.0	13.3	3.5	100.0
	口腔ケア	N=1,766	39.9	49.3	7.2	3.6	100.0
	減薬のための取り組み	N=1,766	61.5	26.3	7.4	4.8	100.0
	排泄の自立をめざした取り組み	N=1,766	51.2	36.2	8.4	4.1	100.0
	食事を経口摂取に戻すための取り組み	N=1,766	63.3	28.9	2.7	5.1	100.0

表２　日中の職員数、外部事業者との連携有無別に見た「特に力を入れている取り組み」の割合（%）

		予防トレーニング系	主体的機会づくり系	基礎的管理系	ケアからの自立系
日中の職員数	４人未満	6.7	8.9	18.8	8.1
	４～10人未満	7.2	13.0	19.2	12.8
	10人以上	11.1	9.3	22.8	9.3
外部事業者との連携	あり	16.2	48.5	25.2	38.3
	なし	4.4	4.4	17.0	2.4

表３　新規入居者の要介護度（自立～要支援２）の割合別に見た取り組み状況（%）

	予防トレーニング系	主体的機会づくり系	基礎的管理系	ケアからの自立系
0%	7.2	4.5	26.8	6.8
20%未満	11.7	4.9	18.4	7.8
20～40%未満	4.8	13.1	15.5	13.1
40%以上	7.6	21.6	10.9	16.2
無回答	5.0	2.0	14.9	4.0

高齢者向けの住まいでは、入居時に自立や軽度の人を対象とするところと、要介護者を中心としたところがあることから、両者の違いについても、特に力を入れている取り組みの状況が分析されている。サ高住（非特定施設）では、自立～要支援２までの新規入居者の割合が高いほど、主体的機会づくり系やケアからの

自立系に力を入れている取り組みのある割合が高かった。反対に、基礎的管理系については、自立～要支援2の割合が低いほど、力を入れている取り組みのある割合が高かった（表3）。

予防トレーニング系の取り組みに関しては、「筋力の維持・向上のためのトレーニング等」「歩行訓練」「認知症予防のためのプログラム」のいずれについても、サ高住（非特定施設）では「別途料金を徴収」して実施している場合のほうが、特に力を入れて取り組んでいる割合が高かった（表4）。介護付き有料老人ホームでは、認知症予防プログラムの実施を除いて、「原則基本サービスに含む」形で実施している方が、特に力を入れて取り組んでいる割合が高かった。

表４　費用負担の形態別に見た予防トレーニング系の取り組み（%）

		筋トレ	歩行訓練	認知症予防
全体	原則基本サービスに含む	15.0	13.6	12.1
	別途実費等を徴収	14.4	11.9	19.7
	無回答	9.0	6.2	6.4
介護付	原則基本サービスに含む	21.6	19.2	17.7
	別途実費等を徴収	11.5	9.6	39.0
	無回答	4.8	2.5	2.3
住宅型	原則基本サービスに含む	10.8	9.5	9.2
	別途実費等を徴収	12.5	10.4	14.7
	無回答	10.4	9.0	6.7
サ付（特）	原則基本サービスに含む	10.1	6.9	7.4
	別途実費等を徴収	20.0	10.0	0.0
	無回答	18.8	15.0	23.1
サ付（非特）	原則基本サービスに含む	10.5	10.3	7.0
	別途実費等を徴収	19.7	16.0	17.0
	無回答	8.7	4.4	7.6

○入居者の買い物等の状況

続いて、入居者の社会参加に関して、買い物等の状況を示す。サ高住（非特定施設）では、半数以上で「入居者が個別に買い物等に出かける」「希望に応じて職員が買い物等を代行する」が「随時／定期的に実施」されていた。「実施したことがある」まで含めると8割程度を占める。その一方で「地域の商店等による出張販売会、青空市等の開催」や「希望者を募って、入居者を集めて買い物等に出かける」の実施率は3割弱である（表5）。介護付き有料老人ホームでは、この2つの実施率がそれぞれ約4割と約6割であるのと対照的である。

表５　入居者の買い物等の状況（%）

サービス付き（非特）		実施していない	実施したことがある	随時/定期的に実施	無回答	全体
入居者が個別に買い物等に出かける（職員の同行を含む）	N=1,766	12.1	31.5	54.5	1.9	100.0
希望に応じて、施設の職員が買い物等を代行する	N=1,766	19.8	36.9	41.2	2.1	100.0
地域の商店等による出張販売会、青空市等の開催	N=1,766	69.8	10.4	17.2	2.7	100.0
希望者を募って、入居者を集めて買い物等に出かける	N=1,766	68.6	17.8	11.0	2.6	100.0

○地域とのかかわり

入居者と地域との直接的なかかわりについては、残念ながら調べられていない。その代わりに、サ高住と地域とのかかわりに関しては、地域ケア会議や多職種連携会議等への参加状況、町内会・自治会等への加入状況、自治体と連携した防災の取り組みの３点について調査がなされた。

まず、地域ケア会議や他職種連携会議等への参加は、どの住まいのタイプでも半数強が地域ケア会議や多職種連携会議等に参加した経験がある（表６）。町内会や自治会等には、介護付き有料老人ホームの６割弱がホームとして入居者全員が加入しているのに対して、サ高住では個人での加入を含めても５割程度にとどまる（表７）。自治体と連携して行っている防災のための取り組みは、いずれの施設類型についても、どの項目も低い水準である。相対的に取り組みの割合が高いのが、「災害に備えた食料等の備蓄」で３割前後、「災害時の一時避難所・退避場所の提供」が４分の１程度であった（表８）。

表６　地域ケア会議や多職種連携会議等への参加状況（%）

地域ケア会議や多職種連携会議等への参加状況	割合				
	全体 N=5,887	介護付有料老人ホーム N=1,501	住宅型有料老人ホーム N=2,489	サービス付（特） N=130	サービス付（非特） N=1,766
参加したことがある	53.9	50.5	56.3	48.5	54.0
どのようなものかは知っているが、参加したことはない	30.8	32.4	29.9	37.7	30.1
どのようなものか知らない	9.1	10.3	8.7	9.2	8.6
無回答	6.2	6.7	5.1	4.6	7.4
全　体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表７　町内会・自治会等への加入状況（%）

町内会・自治会等への加入状況	割合				
	全体 N=5,887	介護付有料老人ホーム N=1,501	住宅型有料老人ホーム N=2,489	サービス付（特） N=130	サービス付（非特） N=1,766
ホームとして加入（入居者全員が会員）	46.1	57.8	44.2	39.2	39.4
入居者ごとに加入するが、全員が加入している	1.0	0.7	0.8	0.8	1.6
入居者ごとに加入するため、一部入居者のみが加入している	8.9	6.5	8.2	8.5	12.1
加入していない・加入している入居者はいない	38.4	28.5	43.0	43.1	39.9
無回答	5.5	6.5	3.7	8.5	7.0
全　体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表８　自治体と連携して行っている防災の取り組み（%）

自治体と連携して行っている防災のための取り組み（複数回答）	割合 全体 N=5,887	介護付有料老人ホーム N=1,501	住宅型有料老人ホーム N=2,489	サービス付（特） N=130	サービス付（非特） N=1,766
自治体との防災協定の締結	14.0	14.8	15.1	13.8	11.8
災害時の一次避難場所・退避場所の提供	25.0	25.6	26.2	25.4	22.9
福祉避難所の提供	12.1	13.1	12.6	13.1	10.4
災害に備えた食糧等の備蓄	28.8	31.1	28.4	26.9	27.7
非常用電源・燃料等の確保	18.5	20.7	17.2	17.7	18.5
近隣の災害時要援護者の把握	11.2	9.1	14.0	6.9	9.4
その他	7.3	6.2	7.5	6.9	7.8
無回答	38.2	41.1	35.0	41.5	39.8
全　　体	－	－	－	－	－

表９　建物・設備等の地域への開放状況（%）

サービス付（非特）		該当設備がない	該当設備はあるがほとんど利用されていない	入居者のみが利用	入居者に加え地域住民も利用	無回答	全体
食堂･レストラン	N=1,766	37.6	1.6	52.4	6.5	1.9	100.0
喫茶･カフェ	N=1,766	86.5	0.8	5.8	4.4	2.5	100.0
入浴設備	N=1,766	17.7	2.8	77.1	1.0	1.4	100.0
機能訓練室(ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾙｰﾑ､ｽﾀｼﾞｵ等)･ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ機器	N=1,766	75.9	2.0	16.5	3.1	2.5	100.0
多目的ホール・集会室・ギャラリー等	N=1,766	54.2	3.2	28.3	12.5	1.9	100.0
会議室等	N=1,766	62.8	10.8	16.1	7.7	2.7	100.0
庭・駐車場等屋外のフリースペース	N=1,766	24.3	7.6	51.0	14.9	2.2	100.0
上記以外の共用設備等	N=1,766	54.5	1.1	9.5	2.2	32.8	100.0

次に、建物や設備の地域への開放状況も見ておく。全般的に非常に低い水準であるが、「庭・駐車場等の屋外のフリースペース」が約15%、「多目的ホール・集会室・ギャラリー等」は1割強で地域に開放されている（表9）。施設類型による違いはほとんどないが、サ高住（非特定施設）の「食堂･レストラン」は6.5%が開放されており、有料老人ホームの2%台と比べると相対的に高いといえる。

さらに、入居者に提供するサービスなど、住宅が持つ機能を活かして地域住民等に向けたサービス提供を現在行っている割合も調べられている。まず、入居者のみを対象にするものと地域住民等にも提供するものとを合計したサービス実施率では、「見守り・安否確認サービス」が70.1%、「食事の提供（給食型）」が63.4%、「体験入居」が48.4%の順番で高い。地域住民等に対して提供されているサービスだけで見ると、「体験入居」が22.1%、「地域の行事・イベント等の企画・運営への参加」が12.6%、「文化活動」が10.9%、「総合事業・地域支援事業・公的な健康づくり関連事業等」が9.8%であった（表10）。今後の地域住民等へのサービス提供意向については、「地域の行事・イベント等の企画・運営への参加」が24.2%で最も高く、「各種セミナー・講演会・専門家等による相談会」が17.4%でそれに続いた。

表 10　住宅の機能を生かした入居者以外への地域住民等向けサービス提供（%）

サービス付（非特）		提供していない	入居者のみを対象に提供している	入居者のほか、地域住民に対しても提供	無回答	全体
食事の提供（食堂等で提供する給食型）	N=1,766	35.0	59.4	4.0	1.6	100.0
(食事の提供（自宅・居室等への配食サービス）	N=1,766	53.7	41.6	2.5	2.1	100.0
見守り・安否確認サービス	N=1,766	28.5	68.2	1.9	1.4	100.0
保険外の家事援助等のサービス	N=1,766	43.6	51.5	3.0	1.9	100.0
総合事業・地域支援事業、公的な健康づくり関連事業等	N=1,766	69.1	18.3	9.8	2.8	100.0
身体機能維持のための軽運動・介護予防・リハビリ等	N=1,766	60.8	29.6	7.4	2.2	100.0
認知症予防のためのプログラム	N=1,766	73.6	19.0	5.0	2.4	100.0
認知症カフェ	N=1,766	91.8	2.0	4.2	2.0	100.0
文化活動（ホームが提供するアクティビティ）	N=1,766	63.6	23.3	10.9	2.2	100.0
各種セミナー・講演会、専門家等による相談会	N=1,766	79.4	9.3	8.8	2.4	100.0
成年後見制度の説明や利用あっせん	N=1,766	70.0	25.3	2.4	2.3	100.0
ボランティア活動・地域活動等の紹介・あっせん	N=1,766	76.9	15.6	5.2	2.3	100.0
入居者・高齢者等への就労機会の紹介・あっせん	N=1,766	94.6	2.4	0.7	2.3	100.0
子ども食堂	N=1,766	97.2	0.2	0.6	2.0	100.0
小・中学生等への学習支援・寺子屋等	N=1,766	96.1	0.7	1.0	2.2	100.0
学童保育、放課後の子どもの預かり・居場所づくり等	N=1,766	96.5	0.3	1.0	2.1	100.0
障害者への就労機会の提供（障害者就労支援事業等）	N=1,766	92.5	2.4	2.9	2.2	100.0
一般高齢福祉サービスとしての短期利用（緊急時ショートステイ等）	N=1,766	86.2	3.7	7.4	2.7	100.0
空室（空床）利用型の宿泊サービス（保険外・自費負担サービス）	N=1,766	84.6	3.2	9.9	2.3	100.0
体験入居	N=1,766	49.3	26.3	22.1	2.3	100.0
同一建物内の一部居室の障害者・ひとり親世帯等への賃貸	N=1,766	94.4	2.5	1.0	2.1	100.0
地域の行事・イベント等の企画・運営への参加	N=1,766	68.7	16.0	12.6	2.7	100.0
地域住民も参加する自主運営型のサークル活動等への支援	N=1,766	85.8	5.3	6.5	2.4	100.0

3. まとめ

現在のサ高住を概観すると、およそ8割以上が介護・医療関連の業種を母体とする企業によって運営され、約半数が30戸未満の小規模な住宅である。また、専有部分の床面積は25㎡以上とされているにもかかわらず、全体の約4分の3はそれを満たしておらず、共用設備を整えることで運用されている実態が、登録情報のデータから浮き彫りにされた。

サ高住は、入居時に自立や軽度の人を対象とするところと、要介護者を中心とするところとに二極化していると一般に言われている。前者は住宅の設備面を重視し、後者は介護サービス面を重視した運営がなされていることから、サ高住とひとことで言っても、スタッフと入居者とのかかわり方には大きな違いがあるだろう。野村総合研究所による調査結果を通じて、入居者の生活の質を高める取り組みの現在のありようは有料老人ホームとの対比から描かれた。しかし、サ高住のさらに内部での運営理念の違いについても考慮した分析がなされれば、この住まいの特性はさらに明確になったと思われる。

興味深いのは、新規入居者の要介護度の割合別に見た、「自立支援／入居者主体等の生活・ケアの取り組み」状況である。要介護度の低い入居者が多いほど「主体的機会づくり系」や「ケアからの自立系」の取り組みが行われ、反対に要介護度の低い入居者が少ないと「基礎的管理系」の取り組みが増えることを示していた。野村総合研究所の報告書からは他の項目に関する結果はわからないが、入居

者のウェルビーイングや社会参加にかかわる住宅ごとの特徴について、入居者の要介護度の分布にもとづいてとらえていくことは、サ高住をより詳細に理解する手がかりとなると考えられる。

現状では、サ高住は必ずしも積極的に地域に開かれたものとなっていない。庭や駐車場、ホールなどの貸し出しがわずかに行われているにとどまり、町内会への加入では有料老人ホームのほうがむしろ高い水準にある。有料老人ホームに比べると元気な人が入居していると想定されるサ高住で、なぜ地域との交流がさほど行われていないのか。次章以降の調査で明らかにしていきたい。

参考文献

サービス付き高齢者向け住宅情報提供システム，2019
「サービス付き高齢者向け住宅登録状況（平成31年1月末時点）」
サービス付き高齢者向け住宅情報提供システム，2018
「サービス付き高齢者向け住宅の現状と分析（平成30年8月末時点）」
野村総合研究所，2018
『高齢者向け住まいにおける運営実態の多様化に関する実態調査研究報告書』
（平成29年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分））

（白瀬　由美香）

第３章　研究概要

１．方法と目的

本研究では、3つの調査を実施した。なお、調査の実施にあたっては、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の倫理審査を受けた。

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅運営側インタビュー調査

比較的先進的・意欲的で、社会参加や住民同士、あるいは地域社会との交流、役割の創出に取り組んでいると思われるサ高住の施設責任者と住宅スタッフにインタビュー調査を実施し、サ高住でどのようなサービスが提供されているのかを詳細に把握した。

サービス付き高齢者向け住宅協会から紹介を受け、基礎的サービスにとどまらず、居住者の社会参加や交流に積極的に取り組んでいるサ高住として、首都圏と関西圏に存するそれぞれ3つを対象に、施設長と住宅スタッフに対してインタビュー調査を行った。

調査内容は次に挙げる質問項目をもとに半構造化インタビューガイドを用いて実施した。インタビューはICレコーダーにて録音し、テープ起こしをしてデータとして分析に用いた。

・施設長調査の質問内容
　社会参加の仕組みの有無と内容
　地域交流の仕組みの有無と内容
　就労の仕組みの有無と内容
　上記のような活動への参加を促す仕組み
　入居者の特徴（年齢、居住地、経済的状態、介護状態）
　居住者間等の交流
　自己決定支援
・住宅スタッフへの質問内容
　提供サービス内容
　共有スペースの有無
　居住者の介護度の変化（①入居前と入居後、②経年変化）
　居住者の生活の様子
　ほとんど居室に閉じこもりの人の割合
　入居者間での交流の度合い
　訪問者の程度（無訪問者の割合）
　自立度（鍵の扱い）
　社会参加の仕組みの有無と内容
　地域交流の仕組みの有無と内容

参加を促す仕組み
自己決定支援

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅居住者インタビュー調査

4つのサ高住に居住している高齢者5～6名に対してグループ・インタビュー調査を実施し、高齢者のサ高住での生活の様子や、満足している点、あるいは不満な点を明らかにした。インタビューでは研究会委員の1-2名がファシリテーターとして参加した。尋ねた内容は以下のとおりである。

1）サ高住にどのくらい住んでいますか
2）サ高住に住むことに決めた理由は何ですか。また、決めたのは誰ですか
3）サ高住に移る前のお住まいはサ高住の近くですか
4）ご自宅はどうなっていますか。家具や荷物の処理はどうされましたか
5）サ高住に入って新しく親しい方はできましたか
6）ご家族やお友達とのお付き合いはいかがですか
7）日ごろの生活の様子をお聞かせください。（外出頻度、食事、掃除、など）
8）スタッフの方とはどのようなお付き合いですか
9）サ高住の生活で楽しいことは
10）逆にサ高住の生活で困っていることはありますか
11）サ高住の生活に満足していますか
12）不満な点は
13）今度どのように生活していきたいですか

サ高住運営側インタビューと同様、インタビューはICレコーダーにて録音し、テープ起こしをしてデータとして分析に用いた。

＜３＞高齢者住宅財団調査の二次分析

一般財団法人高齢者住宅財団が厚生労働省の平成24年度老人保険健康増進等事業として委託を受けて実施した「サービス付き高齢者向け住宅の実態に関する調査」のデータの提供を受け、サ高住が提供しているサービスの内容やスタッフなどの人員構成と、それらが居住する高齢者にどのような影響を与えているのかを検討した。

（片桐　恵子）

2.インタビュー対象サービス付き高齢者向け住宅の概要

サービス付き高齢者向け住宅インタビュー調査で調査対象となった8つのサ高住の特徴を以下にまとめた。

サ高住1

開設年	2015年
施設概要	48室、全室個室 25.03㎡～34.56㎡
設備	・居室設備 エアコン、洗面台、暖房便座付トイレ、緊急呼出装置、収納、下駄箱、浴室、ミニキッチン、洗濯機スペース、固定電話設置可能、玄関収納椅子 ・共通設備 エレベーター、冷暖房完備、温水洗浄暖房便座付トイレ、特殊浴室、緊急呼出装置、来客用駐車場（2台可）、自転車置場（15台可）、オートロック、インターホン
入居条件	自立～要介護5
費用	入居時費用:0円 月額利用料:18.9万円～21.9万円
サービス	・介護、看護 食事や栄養ケア、安心の医療体制など、専門スタッフによる介護サービスを提供。多職種が連携して支援。 ・食事 多彩な料理を提供するだけでなく、個別のリクエストにも対応（有料）。食べる楽しみを通じて心身の健康を支えるためのこだわりあり。 ・居住空間 プライバシーが守られる居室、コミュニケーションが生まれる共有空間。快適に過ごせる工夫多数。 ・アクティビティ 各ホームで、さまざまなプログラムを用意。楽しみながら達成感を得て、元気になるよう内容に工夫。
その他	

サ高住２

開設年	2012年
施設概要	1LDK、2LDK、3LDK 35.84㎡～71.88㎡ 129戸(内66戸子育て住戸、62戸シニア住戸、1戸管理人室)
設備	カラーモニター付きインターフォン、洗浄機能付便座、グリル付きシステムキッチン、浴室追炊機能、エアコン実装、ミストサウナ付き浴室乾燥換気システム、フローリング、24時間換気システム、BS/110℃CS、光ファイバー対応、防犯カメラ、CATV、ノンタッチキーシステム、フロントサービス、キッズスペース、フリースペース、トランクルーム(一部住戸除く)
入居条件	入居時に自立した生活を営むことが出来る方
費用	入居時費用:53.9万円～100.8万円 月額利用料:16.6万円～28.9万円
サービス	・食事サービス 朝夜有料選択サービス ・セキュリティサービス 館内に常駐管理人を配置(館内の保全や清掃、夜間緊急に対応)、オートロック・防犯カメラ実装、カラーモニターインターフォン、ICノンタッチキーシステム、心肺停止対応用AED(2ヶ所。1ヶ所はシニア用エレベータに設置)、緊急時飲料提供ベンダー設置 ・その他のサービス 受付情報サービス(受付、フロントショップ) 紹介手配サービス(タクシー手配、レンタカー紹介、宅配便発送・取次、クリーニング取次、不用品回収紹介、はがき印刷紹介、ネットスーパー紹介、フラワーデリバリー業者紹介、フードケータリング紹介、出張カルチャー教室紹介、DPE・デジタルプリント) 専用部サービス(家事代行サービス紹介、ハウスクリーニング業者紹介) 高齢者向けサービス(介護業者紹介)
その他	

サ高住３

開設年	2015年
施設概要	1～2人用各2タイプ、計4タイプ 70戸 18.00㎡～51.25㎡
設備	・居室設備 トイレ、洗面、浴室（一部）、ミニキッチン（一部）、クローゼット、エアコン、照明、スプリンクラー、ナースコール、リズムセンサー（一部）、室内洗濯機置場（一部） ・共有設備 食堂、相談室、個浴、介護浴室、洗濯室、ラウンジ、喫煙室
入居条件	満60歳以上の方
費用	入居時費用:0円 月額利用料:10.0万円～15.7万円
サービス	・基本サービス 緊急時対応サービス、巡回サービス、フロントサービス、生活、健康医療相談サービス、保守点検サービス ・食事サービス 朝昼夕有料サービス ・介護サービス 居宅介護支援、訪問介護、訪問看護、デイサービス
その他	・併設施設 居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、通所介護事業所（デイサービス）、訪問看護事業所、クリニック、薬局、学習塾、コンビニエンスストア、交流ホール、共同リビング

サ高住４

開設年	2017年
施設概要	51室（1人用：49室　2人用：2室） 18.00㎡～23.00㎡
設備	・共用設備 食堂、談話室（各階）、介護浴室、特別浴室、洗濯室、キッチン、緊急通報装置システム、スプリンクラー設備、エレベーター、ハーブ園、テラス、庭 ・居室設備 温水洗浄、暖房便座付トイレ、洗面、クローゼット、エアコン、緊急通報ボタン（スタッフコール）、スプリンクラー設備、固定電話設置可能
入居条件	概ね60才以上の方、要介護認定を受けている方
費用	入居時費用：0円 月額利用料：16.1万円～16.4万円
サービス	・フロントサービス 訪問者、外出時の管理、郵便物の受取、電話取次等 ・夜間、緊急時対応 夜間巡回、安否確認、緊急通報対応サービス ・代理オーダーサービス タクシー、理容、美容、クリーニング、宅配便の手配 ・生活向上プログラム 四季を感じる外出会、お料理教室、リハビリ教室 ・寝具一式の貸し出しと週1回のリネンクリーニング ・生活、健康個別相談 入居後の環境変化による身体や精神状態についての相談 ・食事サービス 朝昼夕提供（パンやご飯の希望、ご飯の量など個別対応あり） ・介護サービス 介護職員24時間常駐、居宅介護支援事業者がケアプラン作成、訪問介護事業所が一階に併設
その他	

サ高住５

開設年	2014年
施設概要	105戸 18.00㎡～72.00㎡ 1人用1タイプ、2人用4タイプ
設備	・居室設備 トイレ、洗面、浴室（一部）、ミニキッチン（一部）、クローゼット、エアコン、照明、スプリンクラー、ナースコール、リズムセンサー（一部）、室内洗濯機置場（一部） ・共用施設 食堂、個浴、介護浴室、洗濯室、ラウンジ、喫煙室
入居条件	満60歳以上の方
費用	入居時費用:13.2万円～36.0万円 月額利用料:16.7万円～31.7万円
サービス	・基本サービス 緊急時対応サービス、巡回サービス、フロントサービス、生活、健康医療相談サービス、保守点検サービス ・食事サービス 朝昼夕有料サービス ・介護サービス 居宅介護支援、訪問介護、訪問看護、デイサービス
その他	・併設施設 居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、小規模多機能居宅介護事業所、グループホーム、訪問看護事業所、定期巡回随時対応型訪問介護看護事業所

サ高住６

開設年	2014年
施設概要	8戸 26.00㎡～28.00㎡
設備	・居室設備 風呂、トイレ、洗面台、ミニキッチン（IH)、エアコン ・共用設備 居間、エレベーター、洗濯干し場、2階屋上
入居条件	60歳以上（自立から介護認定を受けている方まで）
費用	入居時費用:16.0万円 月額利用料:9.0万円
サービス	・基本サービス 日常生活の相談、24時間緊急対応、安否確認、病気時・体調不良の様子伺い、医療機関への連絡 ・フロントサービス 郵便、宅配物の取り次ぎ、メッセージのお預かり、来訪者の受付案内 ・サポートサービス 昼食提供、配食サービスの案内
その他	「一人ひとりを大切に」をモットーに活動するボランティアによる支援。 個人のプライバシーが守られつつ、入居者の方々が共用の居間で交流したり、ガーデニングを楽しむことが可能。 閑静な住宅地。 ボランティアが中心となって、さまざまなプログラムやイベントを実施。 入居者の方々のボランティア活動やプログラムへの参加を職員やボランティアがサポート。 外国文化に触れる魅力あるプログラムに参加可能。 幼児・子ども・若者と接したり、ボランティアとして子育ての手伝いをすることも可能。

サ高住７

開設年	2015年
施設概要	40戸 18.76㎡～21.97㎡
設備	・居室設備 トイレ、洗面、台所、収納 ・共用設備 食堂、浴室および脱衣室、洗濯室、トイレ、居間
入居条件	単身高齢者世帯:60歳以上の方、または要支援・要介護の認定を受けている方（申請中の方は要相談） 高齢者＋同居者:（配偶者／60歳以上の親族／要介護認定もしくは要支援認定を受けている60歳未満の親族、特別な理由により同居させる必要があると知事が認める者）
費用	入居時費用:6.4万円～6.7万円 月額利用料:9.4万円～9.7万円
サービス	・基本サービス フロントサービス、トイレ誘導、健康相談、環境変化による心身についての相談、日常生活上の相談、食事誘導 ・見守りサービス 24時間介護有資格者が常駐、夜間の定期的な安否確認、居室からのコールに常駐スタッフが対応 ・有料サービス 身の回り援助、緊急の身体介護、買い物代行、外出同行、お預かりサービス、食事介助、朝昼夕食サービス ・医療介護サービス 併設施設によるサービス、病院連携
その他	・併設施設 訪問介護、訪問看護、通所介護、居宅支援事業所

サ高住８

開設年	2017年
施設概要	57戸 25.02㎡～25.65㎡
設備	・居室設備 エアコン、洗面、暖房便座付水洗トイレ、緊急呼出装置、収納、下駄箱、浴室、ミニキッチン、洗濯機スペース、固定電話設置可能、玄関収納椅子 ・共有設備 冷暖房完備、エレベーター、温水洗浄暖房便座付トイレ、特殊浴室、緊急呼出装置、来客用駐車場（1台）、駐輪場（33台、内、屋根付き14台）、ゴミ置き場、インターフォン
入居条件	概ね60歳以上の方で、独居が困難な方や介護保険受給認定を受けている方
費用	入居時費用:0円 月額利用料:16.3万円
サービス	・介護、看護 食事や栄養ケア、安心の医療体制など、専門スタッフによる介護サービスを提供。多職種が連携して支援。 ・食事 多彩な料理を提供するだけでなく、個別のリクエストにも対応（有料）。 ・居住空間 プライバシーが守られる居室、コミュニケーションが生まれる共有空間、快適に過ごせる工夫がある。 ・アクティビティ 各ホームで、さまざまなプログラムを用意。楽しみながら達成感が得られるよう内容にも工夫している。
その他	

（グライナー　智恵子）

3. サービス付き高齢者向け住宅運営側のインタビュー
＜１＞サービス付き高齢者向け住宅各論

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ａ）

1. 提供サービス内容

本サ高住は株式会社が運営しており、スケールメリットを利用して、基本サービス以上のサービスを提供している。1つには介護度が重い人は、日に3回くらいの訪問介護だけでは支えきれない（食堂に行くときの手助け、体位交換、排泄等）ため、自社で持ってる訪問サービスを組み合わせ、訪問介護とサ高住スタッフが連携することで、規定以上に頻繁に介護に入っている。不安で話をしたがる入居者も多く、スタッフが話を聞くなど対応している。これも安否確認以上のサービスである。

2つには、講師を呼んで、文化教室のようなレクリエーション活動を提供している。居住者は300円の参加費を支払う必要があるが、講師料の費用は居住者から徴収するのではなく、会社全体で賄っている。

また看取りまで対応している。

2. 施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

本高齢者住宅は開設から1年ということもあり、特にまだ行っていない。地域の人の集まりの会場として提供はしているが、あまり活用はされていない。自治会には加入している。

サ高住自体で入居者に仕事を提供するようなことは行ってないが、居住者の中には仕事に通っている人もいる。

公共交通機関（バス・電車）に近いため、外出する人が多い。

居住者で仲のいい人たちで外出したり、地域の老人会や歌の会に出かけている人も存在している。

3. 入居者の特徴

①年齢、介護度および経済状態

年齢は平均85.2歳で、比較的高い。介護度が5の人が2人、介護度4の人が2人。一方比較的自立度の高い人も多い。

家賃は約15万円。サ高住としてはこの周辺では比較的安い方であるが、年金だけでは若干不足する。食費はこのあたりでは一番安くて4万円を少し超える程度である。周辺のサ高住では5万円から7万円である。

家族が近くにいるため、1人暮らしで心配なので近くで探して、病院から退院して、自宅に帰るのは不安などがこのサ高住を選んだ理由であった。全体として

は１人暮らしが少し不安定になって入居した人が多い。

自宅は売却する人もいるし、残しておいて定期的に戻る人もいる。入居後すぐに売却する人はいない。入居時の一時金は不要であり、しばらく様子をみてから考えることができるよう、運営者側は高齢者が入居しやすく、かつ、出やすくする工夫をしている。

②生活の様子や居住者間等の交流の度合い

本サ高住はワンルームマンションに近い。防犯カメラを設置し、門限もなく、駐車スペースも若干あり、ペットも可能である。自宅からそのまま移ってくるというイメージを目指しているとのことである。

講師を依頼し、文化教室的な集いを開催しているが、そういう場で居住者間での交流がある。

運営会社は多数のサ高住を持っており、サ高住毎に管理者などが企画して、小学校と連携して催しをしたり、地域での花火大会があれば、花火を見る納涼会を開催するなど、独自に交流の取組みを行っている。もう少し開設から年月を経ているサ高住では、入居者間での茶話会を開催しているところもある。

同じ運営会社のサ高住で、近いエリアでまとまって旅行会社と提携してバリアフリーツアーも行っている。国内だけでなく、海外ツアーもある。

食事は6-7割が食堂を利用し、その他3-4割は自炊をするか、あるいは外に食べに行ったりしている。個別のきめ細かい対応（治療食など）は別料金で対応している。スタッフが配膳する。食事が終わってから、食堂での交流や、居室の行き来は比較的活発である。

このサ高住では部屋の中でずっと過ごしている人は57室の中で、３～４名程度である。

③サ高住内の建物での、居住者の役割分担等の有無

居住者による手伝いというのは行われていない。以前同じ運営会社の他のサ高住で自治会を作ろうとしたこともあったが、年齢が高く、継続性を維持するのが難しいため、現在このサ高住ではそのような取組みは行っていない。運営会社全体のサ高住の中でも自治会があるのは１割に満たない。自治会のサポートも生活支援サービス中に入ってはいるが、サ高住内での自治会の設置・維持は難しいようだ。

４．自己決定支援の尊重

各部屋にお風呂と洗濯機があり、できるだけ普通の生活を続けてもらうような住まいにしている。鍵は入居者に渡し、門限もなく、ペットも基本的に可など、自宅と同じような生活を続けやすいようになっている。

入居に際しては、一度建物の見学に来てもらい、サ高住の仕組みを説明し、理解してもらうよう努めている。半分以上は本人が見学に来て入居を決めている。

それ以外は家族が決定権を持っているが、家族に対してたとえ本人が認知症でも、本人への説明をするよう依頼している。それでも最初は病院や介護施設と混同する居住者がいる。

5．めざすサ高住の方向性

運営会社では、介護度5になっても普通に自由に暮らす環境と、普通に生活する権利があるという理念を掲げている。それを可能にする仕組みとして、介護度5の人でも在宅サービスとサ高住のサービスを組み合わせて1人暮らしができるように工夫している。

協力医療機関と連携して、看取りも可能としている。

6．その他

①自社関連サービスを使うメリット

介護度が重い人はサ高住のサービスだけでは支え切れないため、自社で持ってる訪問サービスで頻繁に介護に入る。企業的に努力して費用は徴収しない。訪問介護とサ高住スタッフが連携。訪問介護だと日に3回くらいしか入れないが、サ高住のインフォーマルのサービスと組み合わせて、生活を支えている。よって自社のサービスを組み合わせた方が連携等が取りやすいが、これは自社関連サービスを使うことによる居住者の大きなメリットもある。

しかし、自社サービスを紹介してあくまで本人に選択してもらうという形であり、強制はしていない。1割2割の人はもともとのケアマネージャーやヘルパーにお願いしているが、徐々に自社サービスに移行していく傾向がある。それは、自社サービスの業者が併設されているので、近くにいるということで頼みやすいとか、ケアマネージャーも頻繁に顔も見られるので、結果として移行したいと望む人も多くなるようだ。居住者には自由に介護保険サービスその他選択できると説明しているが、自社でないと駄目なのではないか、と思っている居住者も若干いるようだ。

②運営会社のスケールメリットを活かしている。1つには居住者のため、もう一つはスタッフにとってメリットがある。居住者に対しては、各サ高住ではないが、ある程度の地域でまとまって、旅行会社と提携してバリアフリーツアーを実施している。国内外のツアーを実施するなど、1つのサ高住では提供できないサービスが可能になる（自由参加）。

また働くスタッフへのスケールメリットもある。会社が大きいため、転勤や異動が可能である。スタッフには昇格の機会や資格取得を支援するしくみが設けられている。仕事の継続のための動機付けとして重要である。

③特に介護度の変化はない。重い人が軽くなった場合はあるが、大きな病気が治ってリハビリをしたためである。中には介護度が軽くなって出ていく人もいる。

④入居一時金を設定しないなど、入居しやすくしている。サ高住に満足できなかったり、健康状態が悪くあるいは良くなったときは、転居もしやすい。

（片桐　恵子）

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ｂ）

１．提供サービス内容

建物を入るとエントランスホールにはフロントがあり、その隣にサ高住の管理人室がある。外部のサービス会社に委託した住宅スタッフが配置され、サ高住の基本サービスである安否確認、日常相談、緊急時の相談が行われている。また、クリーニングや宅急便の取次ぎ、タクシーの手配なども、入居者からの相談や要望に応じて行われている。住宅スタッフは介護職出身者が多いが、介護施設とは違うという認識のもと、過度な介入はせず、ホテルのようなクオリティーの高いラグジュアリー感のあるサービス提供を心がけているとのことである。食事は火曜を除いて毎日朝食と夕食が提供されているが、喫食率は３割程度である。体調不良の際には食事を居室に運ぶ有料サービスもある。フロントや食堂には、定期的にパンの販売や移動スーパーが来訪し、入居者の買い物の便宜を図っている。建物内にはトランクルームも備えられ、有料で利用できる。居室には緊急通報装置や人感センサーが付いており、警備会社とつながっている。

２．施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

「多世代交流型賃貸マンション」として、サ高住であるシニア住戸のほか、子育て支援住戸が併設され、共通のエントランスホールが設けられている。サ高住１階には入居者用の食堂があり、朝食、夕食をとるほか、入居者間交流や地域間交流のイベントスペースとしても活用されている。１階には子育て支援住戸居住者も利用可能な多目的スペース、子どもの遊び場となるキッズコーナーもある。さらに、屋上庭園があり、開錠時間内は自由に出入りすることができる。

屋上庭園では、造園業者の協力を得て、さつまいも、ブロッコリーなどの野菜の苗植え会や収穫祭などのイベントを行っている。そのほかには、NPO法人や高校の和太鼓部などにサポートを依頼し、食堂でのハローウィーンやクリスマスのイベント開催、パーティーでの演奏披露などをしてもらっている。エントランスホールにも季節ごとにクリスマスツリーなどの装飾がなされている。

また、地域の秋祭りでは神輿や山車が住宅の前まで来るルートになっているので、入居者が子育て支援住戸の住民やそれ以外の地元住民とも交流する機会となっている。マンション敷地内の広場は近隣の子どもたちの遊び場でもあり、入居者は「長屋の子ども」や孫のような感覚で子どもたちと接している。

３．入居者の特徴

①年齢、介護度および経済状態

シニア住戸の現在の入居率は96.1％であり、平均年齢は81.1歳、男女比は3:7で女性のほうが多い。単身の男性は９名入居している。もとからこの自治体内に

住んでいた人や、子ども世代により地方から呼び寄せられた人が多い。介護保険サービスを利用していない高齢者が過半数を占め、介護保険上の自立が約60％、要支援が約35％で、残り5％が要介護1～3の認定を受けている。骨折などで入院したことを機に入居してきた人などは、入居後に回復し、要介護度がむしろ下がる場合もある。入居時には家賃3ヶ月分の敷金が必要であり、月々の支払いも家賃13～25万円に加えて、生活支援サービスが約2万円、食費約4万円のほか光熱費が月々かかる。それらを支払えるだけの経済力のある人が入居している。

②生活の様子や居住者間等の交流の度合い

基本的に通常の賃貸住宅と同様の生活を送っている。居室はスペースが広く、引き戸になっているので、車いすを利用するようになっても住み続けることができる。食堂にパンの販売や移動スーパーが定期的に来ることから、建物の外に出かけなくても生活は可能となっている。居室への食事の配達サービスもあるものの、体調がよほど悪くない限りは、居室から出ているだろうと認識されていた。正確なデータは不明であるが、居室に閉じこもったきりの人はほとんどいない様子であった。

食堂のスペースを利用して、ラジオ体操、オセロ、囲碁、麻雀、カラオケなどの趣味の会が開催されている。これらは入居者から住宅スタッフに相談があり、活動が始められたという経緯がある。女性入居者からは仲間がほしいという要望がよくスタッフに寄せられるという。他方、男性は引退後には自由になりたいという人も多いが、サポート役のような形で上記の会の運営にかかわる人もいる。また、高齢者同士の交流よりも、住宅スタッフと話したいという入居者もいるので、個々のニーズに応じた対応をしている。

近隣に親族が居住している入居者も多いことから、親族とは頻繁に訪問しあっているようである。

③サ高住内の建物での、居住者の役割分担等の有無

施設ではなく住宅であることから、入居者の自発性にまかせており、建物内での役割分担は特に定めていない。

4．自己決定支援の尊重

自分らしい生活を自己責任で送ることが基本とされている。住宅スタッフ側から過度な介入はせず、あくまで入居者の自主性を尊重し、入居者からの要望にスマートに応じることが目指されている。趣味の会の立ち上げや運営についても基本的に入居者の自発性を尊重している。食欲が減っているなど体調が心配な者には、ケアマネに連絡をして、適切な機関につないでもらうようにしている。

日中はオートロックが解除されていて、その時間帯は誰でも建物に入ることができるようになっている。各居室には非常ブザーが付いており、警備会社につな

がっている。居室の鍵の管理は入居者が行うのが基本であることから、認知症になるなど鍵の管理が難しくなった人が住み続けることは難しいと考えられている。

5．めざすサ高住の方向性

自宅や介護施設の特性と比較して、自由度と安心の高さがあることがアピールポイントである。入居者が自分の意思・判断で自由に生活できること、プライバシーが守られていること、求めれば誰かが駆けつけてくれて安心に住まえること、などが目指す方向性となる。アクティブな入居者同士によって日々の交流がなされることが期待されている。

6．その他

居室は広く、1戸当たりが35～72㎡であり、全体としては1Kから3LDKまで揃っている。最も戸数が多いのは40㎡程度の1LDKタイプである。

他社と大きく異なる点は、自立型サ高住として、「常に安心」ではなく「緊急時の安心」を重視していることが特徴として挙げられる。医療や介護の施設を建物内に併設しない方針もそれと一致している。サ高住の住まいとしての側面を重視し、居室内の浴室やキッチンは通常の住宅と同様のものが備えられ、夫婦での入居も可能である。普段は自立した生活を送り、もしもの場合には住宅スタッフのサポートを受けて、自らが選択した必要なサービスを利用することが想定されている。

（白瀬　由美香）

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ｃ）

１．提供サービス内容

提供しているサービスは、サービス付き高齢者住宅として提供しなければならないもののみで、追加のサービスはほとんど行っていない。具体的な提供サービスは、朝に１回利用者の部屋に伺うこと（朝９時半～10時の間）・生活相談・セコムを介しての24時間緊急対応・体調不良時の見回りや医療機関への連絡・郵便物の取り扱い・メッセージや訪問者の対応である。その他のサービスとして、併設しているカフェの昼食を割安で利用できるようにしていたり、居住者間でのトラブルや認知症者の対応も必要時には行っている。

２．施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

同じ施設内の他の部門との日常的な交流はないが、物干しやエレベーターは共有であるため、他者の存在を感じることは出来ている。また、サ高住に限ったものではなく、運営母体単位で行うコンサートや子供を対象とした祭りへの参加やクリスマス会での演奏の披露、戦争体験を話す機会を設けるなど、世代間交流が活発に行われているという特徴がある。その要因としては、運営母体に登録されているボランティアが何十人といることで、イベント数が多いことや、サ高住を単体の施設としなかったこと、ボランティアや趣味活動等ができる場所や内容を調べて個別に情報を提供していることが考えられる。また、施設内のバザーやカフェ運営に携わったり、全員ではないが、玄関ポーチの清掃などをバイト代として支払い、役割を持ってもらっている利用者もいる。地域包括支援センター主催の体操に参加して友達を作ってくる人もいる一方で、精神的・身体的な面から積極的に参加できない人もいる。

また、家族の訪問の頻度は多くはないが、月に１回は息子が来たり、数か月に１回は親族が様子を見に来られたり、友達が会いにくるなど、外との交流が途切れている人はいない。

３．入居者の特徴

①年齢、介護度および経済的状況等

入居者の年齢は71歳～94歳と幅広く、70代の居住者は４名であった。現在は認定なしの方と要支援１・２の方のみ入居しており、金銭管理が心配な方や話の整合性が合わないといった方もいるが、全体としては入居後大きな変化はみられていない。しかしながら、肺炎等で入院したことで要支援から要介護５まで介護度が上がった人もいた。肺炎を発症する等のイベントが無い限りは、大きく介護度は変化していない。介護度により、必要な介護サービスも人それぞれではあるが、介護の対象になりたくないと考え、身の周りのことはできる限り自分で実

施したいと考えている人がほとんどである。経済的状態や居住前の家族構成はバラバラだが、基本的に大卒で銀行員や大学の教員など高学歴の居住者が多い。自分が今後どのように過ごしていきたいのかについて考えや自分なりの信念をもっている人が多い。

②生活の様子や居住者間の交流の度合い

1名掃除のサービスやデイサービスを利用している方もいるが、洗濯や料理等日常の活動は基本的には自立して行っている。教会や習い事へ行ったり、公園へ体操をしに行ったりと基本的に毎日外出している。居室に閉じこもっている方はおらず、何かしら毎日出かけている方が殆どだが、冬の寒い時期等は共有スペースでお茶をしている様子も見られている。基本的には独立して生活されているため毎日一緒に過ごしているわけではないが、居住者間でよく声を掛け合い、お互いのことを気にかけており、カフェでの利用者主体の誕生会等のイベントやエレベーターで顔を合わした際に、自然に交流する等、支援・被支援の関係ではない人との交流がある。水場とIHが設置してある共有のリビングがあるだけではなく、同施設の他部門とエレベーターや物干しを共有することで、他部門との直接的な交流はないが、常にそれぞれの存在を意識して生活を送っている。

また、食事の際には、施設側から配膳するのではなく、施設に併設されているカフェを利用してもらうことで、更衣や移動といった活動や、外界と触れるきっかけづくりとなっている。カフェの調理者はボランティアが順番に担っており、お昼にその人達と利用者が会話する様子もみられ、人との繋がりも保たれている。カフェの利用状況は週の半分ほどで、残りの週の半分は、自身で自炊や外食をして各個人で食事を摂られている。核となる利用者が声をかけて何人かで集まり食事を摂ることもあるが、あくまでも利用者個人の意思で食事を選択されている。

③サ高住内での居住者の役割分担等の有無

カフェの手伝いや、職員の仕事の手伝い等を行ってくれる利用者もいる。また、核となる人がいて、クリスマス会や誕生日会等を主体となって行ってくれているが、強制力が働いているわけではなく、参加したい人だけが参加するようになっている。

4．自己決定支援の尊重

利用者が自分の暮らしを自分でつくっていく、決めたことを応援するのが職員の仕事だと捉えられている。鍵は利用者に管理してもらっており、門限や面会者の制限もない。女性の利用者の部屋に男性が入ることも制限していない。加齢等による機能低下が生じ、利用者が思っているような生活ができなくなる前に、利用できるサービスの選択肢を広げられるよう、少しずつサービス活用していけるようにサポートしている。介護度が高くなっても、居住を続けたい場合は介護保

険サービスを利用する等を勧めている。介護支援が必要ではないかと判断した場合の情報提供や、施設の特徴、サービスの限度等を伝えることはするが、実際にサービスを利用するのかどうかや、住む場所、今後の生活については家族や本人に決めてもらっている。

5．めざすサ高住の方向性

支援・被支援の関係ではない人との交流を大切にし、あえて多文化・多世代で交流できるような形を大切にしている。施設が何かをしてあげるのではなく、利用者が自分の暮らしを自分でつくることを基盤とし、利用者が自分で決めた生活を職員が支援する。理想としては、その時の利用者に合わせて施設を変化させ、利用者の力がフルに発揮できるように支援していきたいと考えられている。

6．その他

今後は介護保険だけではなく、ちょっとした困りごとをボランティアの人等が請け負う共助の形があってもいいと思うが、施設側がどこまでサービスとして手伝うかを判断することが難しいという意見があった。また、ボランティアありきで始まっている組織であるため、ボランティア主体でどんな活動が必要かを考え運営しており、季節ごとのイベントの企画等を施設側の人間が利用者の情報提供をしつつ行われている。サ高住は終の棲家という意味はまだもっていないと思うが、結果的にそうなることはあるかもしれないとも考えられていた。

一方で、現場のスタッフからは、基本的には自立できない場合には介護保険サービスを利用してもらう等により、サービスを補充してもらうしかなく、それでも安全の確保が出来ない場合には家族等と相談しているという現状や、施設ではなく、あくまで住居であるため、介護度が重い人、医療処置が必要な人にはふさわしいとは思えないが、介護施設と混同されていることもよくあるという意見も聞かれた。また、ボランティア活動が活発であることで、営利目的ではない経営体制の中でも、イベントに参加してもらうといったサービスを提供することが出来ているという施設の特徴を活かした取り組みに対する肯定的な意見も見受けられた。

（グライナー　智恵子）

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ｄ）

1．提供サービス内容

安否確認と生活相談の基本サービスのほか、月２回訪問看護師の巡回、医師の訪問診療もある。それにより要介護5になっても入居可能であり、認知症、胃ろう、インシュリンについても対応可能とされている。介護サービスを利用する場合は、系列グループ企業の事業所が担当し、通常の訪問介護サービスのほか、定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスも提供している。食事もグループ企業に委託している。

外部講師が訪問して、各種講座、教室を開催するアクティビティサービスがある。参加費は１回300円程度で、体操教室、フラワーアレンジメント、書道教室、カラオケ教室、編み物教室などが開催されている。

2．施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

施設内には、手縫いのアクリルたわしを作って贈る活動を定期的にしているグループがある。また、施設内での活動だけではなく、施設外に積極的に出ていくことを促している。たとえば、アクティビティサービスで講師を呼ぶのではなく、地元の絵画教室に通うようにした例もある。同様に訪問理美容などのサービスは外出を疎外する可能性があるため、慎重に見極めてから利用するようにしている。そのほかの社会参加では、元会社経営者で今でも会社の手伝いに出かけている人もいるとのことであった。

近隣住民との交流は、会社の方針としては推進しているが、実際にはハードルが高く十分に行えていない。地域の体操教室に場所を提供して、開催したことはある。小学校から教職員が見学に来たことはあったが、交流と呼べるものにはまだ進んでいない。現在のところ、地元企業と提携して、内職のような形で仕事を請け負って、入居者が生産に従事するという企画も検討されているとのことである。

3．入居者の特徴

①年齢、介護度および経済状態

入居条件は60歳以上としており、現在の入居者の平均は85歳前後、最高齢は90歳代後半である。男女比は１：２で女性が多く、もとから地元自治体内に居住していた人が中心とのことだった。

入居者48人のうち、約20人が何らかの介護サービスを利用している。骨折等で入院し、病院から退院直後で入居した時の介護度と比べると要介護度は回復する人がいる。他方、自立していた人でも年が経つにつれ、介護サービスが必要になる場合もある。死亡や看護の充実した他施設への転居、自宅に在宅復帰などで２

～３ヶ月に１名は退去する者がいる。

入居者の現役時代の職業は、会社経営者、元公務員、教員や医師、看護師など社会的地位が高く、経済的にゆとりのある人が多いようである。

②生活の様子や居住者間等の交流の度合い

建物は一般的なオートロックのマンションのような外観であり、居住者は自由に出入りすることができ、買い物や散歩など好きなときに外出できる。居室にはトイレ、浴室、洗面台、ミニキッチン、洗濯機置き場が備えられ、「普通の生活」を送れるようになっている。要介護１程度ならば、介助なしで、１人で入浴が可能な浴室となっている。

自立度の高い人、元気な人は友達もつくりやすく、食堂で交流するほか、部屋の行き来は自由に行なわれており、利用者同士で外食に出かけたりなどもある。ただし、それを好まない入居者もいるので、プライバシーは守られるようにしている。新規入居者には、食事で食堂に来た際などにスタッフが付き添って他の入居者にあいさつを繰り返すように心掛けている。

アクティビティサービスは利用者のやりたいものがベースになっていて、利用者から声が上がった場合に参加者を募り、先生を探して開催という流れでスタートする。その後も、入居者には「ちょっと見学してみませんか」というように声掛けをして、気に入れば継続して参加するようスタッフが促している。ただし、全員に一律に声掛けはしないようにしているという。声を掛けられれば来るが、本当に来たいのかどうかわからないこともあるため、自分から行きたいと思っているか、楽しんでいるかを重視して支援している。

したがって、ほとんど居室に閉じこもりであるような人は、いなくはないが、多い訳ではないとのことである。どちらかと言えば元気な入居者が多く、自由度が高いゆえに将来的にはひきこもりがちになる危険性の高いことが課題として認識されている。入居者に対して強制的なことは行わない方針であるため、スタッフから無理には関われない。その人が本当に必要とするものについて、個別の対応をしていく方針で交流の支援をしている。

③サ高住内の建物での、居住者の役割分担等の有無

役割分担は特にないが、庭の草むしりをやらせてほしいと言う入居者はいたことがあった。その場合はお願いしたが、本人からの申し出がある以外には頼んでいない。また、前職が教員だった入居者でアクティビティサービスの講師をしている人もいる。だが、折り紙や書道のような教えられる人がたくさんいる分野については、入居者同士で嫉妬が生じる場合もあり調整が難しいとのことだった。

4．自己決定支援の尊重

入居時の契約には必ず本人が立ち会い、理解できるように説明して納得して入居してもらうことを重視している。家族の代行による契約は認めていない。倶楽部の活動に参加費300円を支払って参加するというのも、本人の意思を尊重し、自己決定の一つと位置づけている。

自由に買い物ができるように、上限額を相談して決め、なるべくお金は入居者が自分で持つように取り組んでいる。お金を持たせることに不安を持つ家族にはスタッフが説得をしている。お金の管理が難しい人には、スタッフが立て替えて買い物するように切り替えているが、その場合にも、洗剤などの日用品や食料品を買う時には、人それぞれの好みやこだわりを実現できるようにしている。

介護サービスの導入を検討する際も、たとえば食事介助にヘルパーを入れることは可能であるが、そうすると食事時間が介助時間として固定されてしまうので、なるべく入居者が自立して自分の好きな時間に食事をとれるように配慮している。

居室の鍵は本人のほかに家族にも持ってもらっている。玄関の事務所にスタッフは常駐しているが、施設のような面会簿への記帳などは行なっていない。夜間でも気兼ねなく家族が訪問できるようにし、宿泊も可能である。また、認知症であっても鍵は入居者が持つこととしている。要介護度が高く、自分で中から鍵を開けられない場合は、スタッフが鍵の預り証を発行して管理している。

5．めざすサ高住の方向性

現在改革が進められているところであるが、もともと創設者の方針により、高齢者の尊厳に重きを置いて、何事も利用者中心に考えてきた。自宅に近い、普通のマンションに近い形で、住み慣れた地域を離れることなく街中に住み続けられるようにすることを目指して運営している。たとえば、玄関は常に開いていて、入居者が自由に外に出られることを重視している。

6．その他

このサ高住では管理者が2名おり、1人が担当マネージャーとして施設整備や契約、労務、会計を担当している。もう1人はラインマネージャーとしてケアマネのケアプランの相談に乗ったり、ヘルパーの指導を行なったりするなど、介護に関する責任者となっている。

各建物の管理者に加えて、エリアごとにスーパーバイザーが配置されている。スーパーバイザーは、在宅高齢者の定期巡回、有料老人ホーム、デイサービスなども含めたグループ会社内のすべての事業所を統括する立場にある。在宅生活が難しくなっても、同一グループ会社の事業所が引き続き関わっていくことを目指している。

（白瀬　由美香）

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ｅ）

１．提供サービス内容

提供しているサービスは、サービス付き高齢者住宅として提供しなければならないもののみで追加のサービスはほとんど行っておらず、追加のサービスが必要な時は外部サービスに委託している。

安否確認は朝（朝食前後）と夜（7時過ぎ）2回、スタッフが居室を回る。その時に応じて、簡単な会話を行っている。

追加で必要なサービスは、母体の関連業者が隣接しており、利便性が高いため、そちらに依頼する人が多い。以前から利用した業者がいた人は引き続き外部業者を使う場合も、こちらに変更する場合もある。基本サービスのほかは追加サービスを利用することになり、追加費用がかかるということを入居前に説明しているが、サ高住が新しい制度であるためか、入居者本人のみならず、家族にもよく理解されていないことがあるということであった。

２．施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

本高齢者住宅の特徴は母体の関連団体を活かして運用されている点と、地域社会とのつながりの機会を持っている点である。

第一の母体の組織の活用として挙げられるのは、一つには人材リソースである。母体の関連業者が隣接しているため、スタッフを他の組織と兼任させ、人材の確保および効率的な運営をしている。さらに関連組織の中に病院のボランティアがおり、ボランティアに掃除や食事の配膳などを手伝ってもらうことで、正規職員のみでは不足する部分を補い、居住者により快適なサービスを提供している。二つには、関連団体である地域包括支援センターが隣接しており、本高齢者住宅において、健康体操の場を提供しており、健康体操には地域居住の高齢者も多く参加するため、地域住民との交流の場となっている。三つには、地域包括支援センターが高齢者住宅の入り口にカフェを併設しており、地域住民のための認知症カフェを行ったり、普通のカフェとしても開放し、住宅外の人との交流の場となっている。

第二の地域社会とのつながりについては、まず、地域の子どもサークルに活動の場を提供しているため、夏休みや春休みに子どもたちが定期的に訪れる。居住者と直接交流する機会が設けられているわけではないが、居住者には子どもと接するいい機会となっている。二つ目には自治体に加入し、地域社会との積極的な交流を行っている点である。本高齢者住宅はもともと都市ではありながら地域社会の絆が強い地域に存する。しかし盆の祭事を行う場所が徐々になくなってきているため、そのためのスペースを提供することで、地域住民との交流の機会をつくっている。また地域の運動会にも居住者の参加を勧めたり、夏には祭事を見物

するため、屋上を地域の人に開放している。本高齢者住宅はまだ開設されて2年であるが、母体の組織の歴史は古く、その歴史をうまく利用しながら、地域社会との交流を図り、居住者の地域社会への参加の機会を提供している。

3．入居者の特徴

①年齢、介護度および経済的状況等

性別では7：3くらいで女性が多い。平均年齢は82歳くらいで90歳以上の人も数名いる。近くに居住していた人も多いが、遠方から来た人も多い。介護度は、自立していて近所のスーパーや、バスでデパートに買い物に行く人もいれば、外部サービスを利用している介護度5の人もいる。設立して2年ということもあり、まだ介護度が重い人は少ない。介護認定を受けていないか、あるいは要支援1～2の人がほとんどである。全体としては、あまり介護度が変化せず、健康状態を保っている印象であるとのことである。

半数は自宅を処分している。収納スペースが少ないので、近くのトランクルームを借りている人もいる。賃料は周辺より少し安いが（理由は不明）、年金だけでは不足するので、貯金を少しずつ取り崩しながら、或いは家族のサポートを得て費用を賄っている人もいる。

②生活の様子や居住者間の交流の度合い

各居室にはＩＨコンロと流し台があり、2割程度の人は食堂を利用せず、食事を自室で作ったり、外から買ってきたりしている。食堂は居住者全員が入ることのできるスペースがあるため、自然に居住者間の交流が図られ、その時間を楽しみにしている居住者もいる。住宅は2階から上の階であるが、1階にはカフェとオープンスペースがあり、地域住民との交流の場が設けられている。

各フロアに共有のお風呂とキッチン付きリビングがある。階により異なるが、洗濯機、テレビがあるフロアもある。階によっては、階のリビングでお茶やお昼を一緒に食べている様子も見られる。外から仕出し弁当をとって食事会なども催されている。家族が食堂や各フロアのリビングを利用して、一緒に食事をすることも可能である。

便利な場所に位置しているため、完全に自立している人はバスやタクシーでデパートなどに外出する。近くの寺社にお参りに毎日行く人や、近所のスーパーに買い物に行くなど半分の人がよく外出している。

居住者の中には、閉じこもりがちであったり、人との交流が難しいという人もいるが、顔が合えばあいさつはする程度の交流はある。1割程度はあまり訪ねてくる人がいない。

鍵は利用者に管理してもらっており、門限や面会者の制限もない。女性の利用者の部屋に男性が入ることも制限していない。

③サ高住内での居住者の役割分担等の有無

時々ボランティアとして、ちょっとした手伝いをしてもらっている（タオルを畳んでもらったりとか、チラシを封筒に入れてもらったりなど）。手伝うことがないかと聞きにくる居住者もいる。

4．自己決定支援

相談に来た時はアドバイス的なことはする。困りごとの相談を受けたら、ケアマネージャーに相談したり、介護認定も受けてない人は地域包括センターに相談したりして、対応している。

5．めざすサ高住の方向性

この高齢者住宅に住むようになったからには、ここで長く生活をし、自宅のような気持ちで生活を送ってほしいので、それが望めるようなかたちを目指しているとのことである。

看取りについては家族などのサポートがあってできるのであれば、普通の在宅と同じようにと考えている。サ高住でということを希望であればなるべく意向に沿うようにしている。

6．その他

①基本的には自立できない場合には介護保険サービスを利用してもらう。関連業者を紹介している。

②40名収容の割には、スタッフ人員は少なく、母体の組織の中で人手をやりくりしている。ボランティアも母体組織のボランティアの支援を受けている。このボランティア活動が活発であることで、イベントに参加してもらうといった基本サービスを超えた交流の機会を提供することが出来ている。

③包括支援センターが建物内にあり、介護サービス系の業者が隣接、密接な連携により運営が可能になっている。

④もともと地域社会が比較的機能しているという地域の特徴を生かしている。行事の際に施設の開放、包括支援センターのプログラム実施への場所の提供、子どものグループへの場所の提供、入り口のカフェの設置などにより、地域との交流は自然に図られている。サ高住自身でのイベントの企画には至っていない。

⑤高齢者は利便性を求めての居住も多く、住宅外への外出の誘因となっている。

（片桐　恵子）

運営側インタビュー調査概要（サ高住Ｆ）

１．提供サービス内容

基本サービスの一環として、毎朝8:30～9:30に安否確認を行なっている。契約にもとづいて、安否確認が取れないときは2人体制で入室して確認する。エアコンの調節ができない人には、午前・午後に個別に巡回して対応する。夏季は介護棟を全室、午前・午後に1回ずつ回り、水分補給と室温管理の熱中症対策をしている。簡単な医療相談、テレビのリモコン、携帯電話の使い方の相談、ゴミの運搬が難しい人への回収、加湿器への給水などは基本サービス内で対応している。それ以外については、ケアプランにもとづいて外付けで介護サービスが提供される。介護サービスは入居前から利用している他社の継続利用が多い。往診医は4ヶ所と提携している。食事は自室で食べることも可能だが、インフルエンザ等の感染症の場合を除いて、スタッフが自室まで運ぶのは有料サービスとなっている。

２．施設の特徴を活かした居住者の社会参加、地域交流の仕組みの有無と内容および参加を促す仕組み

自立棟と介護棟とに分かれており、食堂のほか、デイサービス、機械浴の浴室、相談室、喫煙所がある。介護棟には各階に個浴の浴室、洗濯機・乾燥機、ラウンジ（キッチン付き）がある。ただし、ラウンジのキッチンはあまり使用されていないようであった。

公民館の跡地に建設されたことから、建物内に公民館の機能を果たす施設を備えることが求められていた。多世代･地域交流型住宅として建設され､交流スペース、コンビニエンスストア、学習教室、クリニック、調剤薬局が併設されている。

現状ではサ高住として誕生会やクリスマス会のようなイベントを特に行っていないが、各種団体が建物内の交流スペースで多様な催しを開催しているので、そこに参加する形になっている。交流スペースのコーディネーターが食堂に来て、イベントの案内や声掛けをすることはある。サ高住のスタッフは、エレベーター前の掲示板にイベントのチラシを貼るほか、参加希望者の移動の手伝いを行っている。イベントの時間に訪問介護がある場合は変更にも応じている。他の入居者との交流や映画の楽しみを奪わないように、意思を尊重して介護サービスも提供するようにしている。

今後は食堂の食卓に敷く紙に季節の絵を入れたり、配膳時に折り紙を添えたりすることを通じて、もっと交流を促すきっかけを作ることを検討している。

３．入居者の特徴

①年齢、介護度および経済状態

平均年齢は80歳代の女性が中心で、地元自治体出身者が大部分である。自立

棟の入居者には介護サービス利用者はほとんどいない。介護棟の入居者は介護サービス利用者が多く、日中はデイサービスに出かけていることが多い。入居後に転倒で骨折し、介護度が重くなった人は何人かいる。自立で歩行していたが、シルバーカーや杖を使うようになった人も多い。開設から3年が経過し、自立棟も含めて、身体機能がまったく変わりない人は数えるくらい少ない。家賃水準は同系列の他のサ高住よりも若干低めであり、入居者の経済状況は両極化している。自宅での暮らしが心配で入居する人、病院や老健を退院して移ってくる人が多い。

②生活の様子や居住者間等の交流の度合い

食堂には給茶機があり、お茶を飲みながらトランプをするような女子会も開催されている。一人で居室にいてもつまらないからと言って、食堂で塗り絵をしている人やヘッドホンでラジオを聞いている人もいる。自立棟の入居者には現在も仕事をしていて、毎朝出かけて行き、夜7時過ぎに帰ってくる生活をしている者もいる。介護棟はデイサービス利用者が多いので、まったく閉じこもって部屋から出てこない者はいない。建物の玄関は事務所から見えるので、外出時にはスタッフが声を掛けて様子をうかがっている。

食堂では毎週木曜、日曜にカラオケの会が開催されている。入居者同士がカラオケを通じて仲良くなり、いっしょに買い物に行くなど、個人的なやりとりをしている者もいる。エレベーター前の生け花などをきっかけに、会話が生まれることもある。新しい入居者には、スタッフが声掛けしながら、ほかの入居者とつないでいくようにして、全体へのアナウンスはせず、近くに座った人に紹介する形をとっている。他方、食堂の席の争いなど、交流しすぎによる女性同士の些細なトラブルはよくある。そのため、スタッフは交流を促すよりは、トラブルへの対処が必要だという。

まったく訪問者がない人はほぼいない。家族によっては、ほぼ毎日訪問する場合もあれば、1～2ヶ月に1回の人もいる。面会時間が決まっているわけではないので、夜中に来ることも可能となっている。

③サ高住内の建物での、居住者の役割分担等の有無

居住者による役割分担は特にないが、自立棟には隣接する小学校のパトロールのボランティア活動に参加している者がいる。小学生と交流スペースのコーディネーター、居住者で鉢植えや野菜の栽培などをしていた事例もある。

また、先述したように、食事に折り紙を添える企画を検討中であり、併設のデイサービスで折り紙を手作業として折ってもらえないかと考えている。

4．自己決定支援の尊重

何事に関しても、なるべく本人の意思を尊重していきたいという方針で運営している。サ高住は閉鎖された環境なので、楽しみを奪いたくないというのがスタッ

フの考えであるという。たとえば、居室内は火気厳禁であるので、喫煙所を設け、そこではタバコを吸いたい人には好きなように吸っていただいている。飲酒も自由にしてもらっている。外出についても、介護棟では、受付で行き先を記帳してもらっているが、基本的に出入りは自由である。どうしても外出させてはいけない場合を除いて、妨げない形となっている。

入居契約も本人が必ず内覧をしたうえで行なうようにしている。金銭管理も原則として自身で行なうこととなっているが、一部事務所に預けてもらっている人もいる。大金を持ち込まないこと、外出時には鍵をかけることを掲示板などでも周知している。

鍵の管理については、家族もスペアキーを持っている場合もある。スタッフが預かるのは難しいため、自身で管理できない場合は、日中は鍵を開けっ放しで良いことにしている。閉まっていると、ナースコールで排泄介助に呼ばれたときに対応が難しいからである。その場合、夜間はスタッフがマスターキーで外から施錠する対応をしている。

5．めざすサ高住の方向性

グループ企業には保育や子育て世代の支援をする会社もあることから、全社的に多世代交流を視野に入れた地域包括ケアを推進している。サ高住がどのようなものであるかがあまり知られていないため、まずはケアマネなど介護サービス従事者にもっとよく理解してもらいたいとのことである。イベントに限らない日常の交流を大事にし、サ高住が地域のための社会資源として、要介護者や家族だけでなく、介護にかかわる専門職にもアドバイスをできるような存在でありたいと考えられている。

6．その他

公民館跡地に多世代・地域交流型住宅として建設されたことから、同系列の他のサ高住とは交流への取り組みがやや異なる事例である。交流スペース、コンビニエンスストア、学習教室、クリニック、調剤薬局が併設されていることから、要介護度がある程度重くなっても、生活に必要なことを自ら同一建物内で行い続けられる環境が確保されている。また、サ高住に隣接する交流スペースにコーディネーターがいることによって、多様なイベントの開催が可能となり、同時に入居者以外の地域の人々との交流も実現できるといえる。

（白瀬　由美香）

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅運営側インタビューのまとめ

ここまで6ヶ所のサ高住について運営側インタビュー調査の結果を見てきた。いずれについても法令で定められた登録基準を満たしているのはもちろんであったが、住宅スタッフの入居者との接し方や自己決定支援をどこまで行うか、入居者間の交流や社会参加をどこまで促すかの度合いは異なっていた。以下では、Eat（食べること）、Meet（人と会うこと、交流すること）、Treat（ケアや支援を受けること）の3つの観点から特徴を整理し直してみる。

○ Eat（食べること）

食事に関しては、すべてのサ高住で提供されていた。カフェを併設している1ヶ所を除いて、入居者専用の食堂が設置されていた。ただし、3食を提供するところばかりではなく、朝夕2食のみのところ、休業日のあるところもあった。食事は1食ごとに料金が定められ、事前に予約して利用する方式であった。予約をすれば家族などの訪問者も一緒に食事をとることができるようになっている。月1回程度の頻度でその季節の行事食を出しているところもある。

食堂の利用は、入居者の3割程度のところから、9割以上のところまで大きなばらつきがあった。そして食堂利用率は、必ずしもサ高住ごとの入居者の身体機能の状態や要介護度の分布とは関連していないようである。多くのサ高住において、体調不良などにより食堂で食事がとれない場合は、有料で居室に食事を届けるサービスを行っている。

食堂で食事をとらない場合は、自室で自炊をしたり、外食したり、外で買ってきて食事をとることになる。居室にキッチンの無いサ高住もあり、入居者は共有スペースに備えられたキッチンを利用できる。けれども、共有スペースのキッチンはほとんど利用されていないところもあるようだった。概してキッチン無しの狭い居室は家賃価格も低めではある。だが、そのような住宅を選ぶ人は、生活費を安く抑えたいというよりは、調理が自分でできなかったり、介護が必要であったりするなどで、食堂を利用することを前提にして転居してきているのだとも考えられた。

○ Meet（人と会うこと、交流すること）

部屋にほとんど閉じこもっている入居者はごく少ないようであった。食堂利用率はばらつきがあるが、食堂での食事は入居者同士の交流の場の1つとなっている。新たな入居者には、スタッフが食事の際に座席を案内しつつ、周りの人々に紹介するような取り組みをしているところもある。けれども、入居者全体に対して紹介するようなことはなく、自然な流れで交流するよう、概して過度な介入は控えているようであった。

また、食堂のスペースを利用して、趣味の会やサークル活動も行われていた。

活動内容は、カラオケ、麻雀、体操、囲碁、将棋などである。いずれの場合も入居者の発案をもとに、スタッフが運営をサポートする形で行われていた。参加はあくまで任意であり、スタッフの側から入居者に必ずしも強く参加を働きかけることはしていなかった。どちらかと言うと、入居者間のトラブルを避けるよう、スタッフが配慮している様子でもあった。

住宅内での役割分担については、タオルたたみ、チラシの封入、草むしりなどの作業をボランティアで手伝ってもらったという事例があった。趣味の会やサークル活動の世話役をしていたり、アクリルたわしを編んで贈る国際ボランティア活動をしていたりする例もあった。ただし、入居者に何か役割を与えるということを特別に意図した取り組みは行っておらず、入居者の発意を基本として、スタッフはそのサポートをするというスタンスに徹していた。

調査したすべてのサ高住で、入居者は自分で部屋の鍵を管理し、門限なども定められていないことから、自由に外出することができる環境であった。食堂での食事やサークル活動などを機に入居者同士で親しくなり、ともに外出するような人もいるようであった。家族などの来訪、宿泊も妨げられておらず、日常的に家族と行き来しながら生活を送っている様子がうかがえた。

地域との交流については、一般向けのカフェや交流スペースが併設されたサ高住では、入居者がそこに出向いていき、イベントに参加したり、手伝いをしたりということがなされていた。しかしそれはごく一部のサ高住に限られていた。野村総合研究所による調査では、ホールや屋外スペース、食堂などの建物・設備を地域に開放するサ高住のあることが示されていたが、このインタビュー調査でも体操教室など地域住民の集まりの会場として食堂が利用されているところがあった。サ高住が地域の住民による活動の拠点として、認知され、活用されていくまでには、まだもう少し時間がかかるだろう。

このようにサ高住においては、基本的に入居者の自発性にもとづく施設内外との交流が行われていた。

○ Treat（ケアや支援を受けること）

サ高住の登録基準にしたがい、すべての住宅で安否確認と生活相談のサービスが行われていた。これらのサービスは直営で行っているところがほとんどであったが、1ヶ所は委託で行われていた。食事の自室への配達が有料であるように、どこまでが安否確認や生活相談に含まれるかは、運営する会社の方針によって異なっていた。体調不良時の対応などは、原則としてその都度別料金で対応しているようであった。

建物に医療機関や介護サービス事業所が併設されている場合もあるが、必ずしもすべての入居者が併設された施設を利用している訳ではなかった。医療機関や事業所が併設されていない場合でも、グループ会社で訪問診療や訪問看護、訪問介護を提供している例もあった。とはいえいずれのサ高住でも、医療や介護を受

ける場合には、どこにかかりたいか本人の希望が第一に尊重されていた。入居前から利用しているところを引き続き利用することも多いようであった。

けがや病気で入院した際に安心して住むことができる退院後の住まいとしてもサ高住は活用されているようであった。これは安否確認と生活相談があることに加え、建物内や居室内がバリアフリーであることが理由として挙げられる。そうした人のケースでは、要介護状態であった場合でも適切な医療・介護サービスを利用しながら生活することで、しだいに介護度が改善し、本人も在宅生活の自信を取り戻して、最終的に自宅に戻ることもあるという。

ただし、要介護度が重くなった場合にいつまで住み続けられるのかは運営会社ごとに異なっていた。バリアフリー設備によって、身体に障害を持つことになっても引き続き住み続けられることは共通していた。しかし、認知症になるなど自分で鍵の管理ができなくなった場合は退去しなくてはならないところもあった。他方、認知症でも本人ができる範囲で鍵を持たせるようにし、看取りまでおこなう方針のサ高住もあった。自立棟と介護棟とに分かれているサ高住もあった。

とはいえ、介護サービスは基本的に外付けであり、居住費に加えてホームヘルプやデイサービスを利用する場合、要介護度が重くなると月々の費用が有料老人ホームよりもかかってしまうこともある。そのため要介護度が重い場合は、経済的な理由により、入所施設に移っていく人もいるようである。調査対象のサ高住の中には、同じ企業内で有料老人ホームも経営しているところもあり、その時々の心身の変化に合わせて、転居しても引き続き会社として寄り添っていくことを目指しているとのことであった。

以上のように、サ高住では本人の意思や選択が尊重され、食事やケアに関しては一定の水準のものが提供されて、高齢者が安心して生活ができる環境が整えられていた。その一方で、本人の意思が重視されるということは、強く意思表示して行動できる人でないと、まわりの人々との交流の機会に恵まれない可能性もあるのだとも考えられた。一般にサ高住には、常駐するスタッフ数は有料老人ホームほど配置されていないことから、入居者の社会参加に関する支援を充実させることは、物理的に難しい面もあるのかもしれない。だが、社会参加は高齢者の日常生活機能を構成する重要な要素の一つである。サ高住の仕組みができてからまだ7年程度であり、今回の調査対象となったサ高住は、入居者も比較的元気な人が多いようであった。そのため、スタッフが強力な働きかけをしなくても、ある程度の交流のできる人が入居していると推測できた。しかし、歳を重ねるにつれて心身の機能はどうしても下がりがちになることから、交流や社会参加に対しても、現在よりも積極的な支援や機会の提供が必要となる可能性もあると考えられる。

（白瀬　由美香）

４．サービス付き高齢者向け住宅居住者側のインタビュー
＜１＞サービス付き高齢者向け住宅各論

居住者インタビュー調査概要（サ高住ア）

１．インタビュー参加者の概要

インタビュー参加者は６名で、男性２名、女性４名、年齢は70歳代４名、80歳代２名であった（範囲：73～85歳）。介護度は自立が５名、要支援Ｉが１名であり、居住年数は５～６年が１名、２～３年が２名、１～２年１名、１年未満２名であった(範囲:3か月～５年３か月)。本座談会実施時間は約２時間程度であった。

２．日頃の生活状況：食事

食事を摂る場所は、１名を除き他の５名は朝・夕食時には週の半分以上は食堂を利用していた。昼食や定休日は自炊や外食をしたり、昼食は軽食で済ませるなど、各々が自身の生活スタイルや食習慣に合わせて、食堂を臨機応変に利用していた。

食事の量や味付けに関しては、量も丁度よくメニューも変化に富んでいるため満足しているという声が多く聞かれた。しかしながら、「おいしいのかもしれないけれど、同じ方の料理を３年も４年も供給されると、それはそれでちょっと」というような不満を訴える声も見受けられた。食事の現状には満足されているが、中・長期的な視点で捉えると、食材やメニューのレパートリーの充実など食に変化を求める様子が見られた。

３．日頃の生活状況：掃除

要支援１の方を除いて、他の５名は自分で実施していた。要支援１の方も週に１回程のペースで水回りのみ掃除を手伝ってもらう以外は基本的に自分で行っていた。「まだ動けるから、動ける範囲は自分でやります」とも話され、できる限り他の人の手を借りずに生活を整えることが、残存機能の維持にも繋がっていると推察された。

４．日頃の生活状況：外出および趣味や活動を通しての地域との交流

多い方でほぼ毎日、少ない方でも週に２日は外出されていた。サ高住に居住される以前から趣味で実施していた水彩画の教室に通ったり、プールや体育館でのトレーニング、社会文化センターでのボランティア活動を継続して楽しむことが、結果的に、居住後も地域との交流を保つことに繋がっていた。また、買い物や食事、カフェに行く機会を友人と設けることが、居住場所が変わっても交友関係が途切れることなく、継続することに寄与していた。

5．日頃の生活状況：運動

運動を意識的には実施していないという2名を除き、他の4名は意識的に身体を動かす機会を設けるように努めていた。ウォーキングマシンやプールを利用して本格的な運動を実施するだけではなく、サ高住の周囲をウォーキングしたり、毎週の外出の機会を利用して自転車に乗るなど簡便な運動も実施していた。

6．日頃の生活状況：サ高住での活動への参加

サ高住内には、入居者が自発的に始めた活動やイベント（体操、オセロ、折り紙、カラオケ）、会社・サ高住側が用意したイベント（芋ほり、収穫祭、ハロウィーンパーティ、体操）が複数存在し、それぞれが自分の好みや体調に合わせて、自由に参加していた。季節の移ろいや居住者との繋がりを感じることができるイベントと毎週定期的に開催されるイベントの両者が存在することで、居住者は一定の選択肢の中から活動へ参加することができていた。

7．日々の生活状況：今後行いたいこと、望ましい活動

サ高住内での活動として今後実践したいこととしては、性格や生活背景が様々な居住者全員に共通してあてはまる事柄について、深く話し合い語り合いたいといった内容が共通して語られていた。具体的には、「高齢者ばっかりが集まっているから、本当に一番大きな、深刻なというか、大事な問題（死）についてみんなで考えていく時間があってもよい」という意見や、共通の関心のある本を皆で読んだり、居住地域の魅力について勉強したいといった、知識や思いの共有を求める意見が聞かれた。また、外に出にくくなった人のための楽しみや励みとなる娯楽の充実を求めるなど、サ高住を一つのコミュニティとして捉え、同じ建物空間・時間を共有する仲間意識にも似た感覚を抱いている姿も見受けられた。

更に、ボランティアへの積極的な参加を希望する発言も多くみられた。「恵まれている生活のなかで、あとの人達に残したい、社会的な役に立ちたい」「給食を食べられない子供達に食事を提供しているところでお手伝いできればいいかなと思っている」というように、現在の自身の状況に感謝をしつつ社会に貢献したいという気持ちを抱いている方が大半であった。

また、個人的に今後実践したいこととして、「自分の人生をまとめたい」「（死に対して）どういう心境になるのか、お寺のお坊さんにでもお話を聞きに行きたい」といった、死を身近なものとして捉え、穏やかな死に向かって人生を統合しようとする思いも語られていた。

8．居住者やスタッフを含めた人との繋がりの再構築

住まいがサ高住に変化することで、居住者やスタッフとの新たな人間関係の構築の必要性を認識している方が殆どであった。男性が1人であることや、元来社交的ではない性格により、新たに親しい関係を築くことが難しい方もいたが、食

事の時間や、カラオケなどのレクリエーション活動の場など共通の時間を利用して、部屋を出る時間を増やし、何気ない話題から少しずつ交流の輪を拡げていこうと意識的に人との繋がりをもつように行動していた。一方、スタッフの方との付き合いに関しては、コピーやクリーニングなどの日常生活における手伝いの依頼や、日常会話や良き相談相手といった関係性であった。しかしながら、安否確認はセンサーにより自動的になされる確認だけで、直接顔を見たり会話をしたりといった機会が必ずしも日常的にある訳ではないことから、居住者によっては、スタッフとの間に心理的な距離感を感じている方も存在していた。

家族や友達との付き合いについては、変わらないと答えられる方がほぼ全員であった。「自分達が動けるから、変わらない状態でいられる」という発言もある一方で、「以前の居住地域からは1時間以上かかるので、以前住んでいた地域のボランティア仲間とは関係が薄くなると思う」といった発言もみられた。

9．住まいのサ高住について
～居住決定から現在の生活・今後に対する思い～

サ高住に住むことに決めた理由および決めた人はインタビュー参加者によって様々であった。サ高住に住むことに決めた理由として、妻や夫が亡くなったり、親が介護施設に入所することになり一人で在宅で生活することを余儀なくされ、心配した子供が居住場を探して住むことになったという理由が語られた。また、食事の提供があること、子供の世話にならず、一人でも生活を続けたいという、家族に迷惑をかけたくないという思いが根底にあり、自分自身が納得して住むことを決定した人もいた。サ高住に住むことを決めた理由が自発的、受動的であった両者とも、現在の生活には概ね満足していた。具体的には、食事が付いているのがとても楽でご飯を作ることから解放されることや、庭掃除や雪かきなど労力を使う家事から解放されることなどが語られていた。また、夜間でも連絡すると管理人が迅速に対応してくれることから、自分の身に何かあったときのための備えとして安心感を感じていた。更に、サ高住に居住し始めたことで、「人生の区切りができたことに気づいた」というように、これまでの人生を振り返り、今後の生活を見据えるきっかけとなっている様子が語られていた。

以上のように、サ高住の生活に関しては、スタッフの丁寧で親切な対応や周囲の環境、セキュリティーを含め全体的に概ね満足している声が多く聞かれた。不満な点に関しては、ボランティアに関する情報提供や、加齢と共に外出するのが億劫になってきているため、サ高住内でのサークル活動の充実を求める声が聞かれた。生活での困りに関しては、集団生活のなかで「相手の方がどういう方かよく分からないから、どういう言葉遣いでお話したらいいかわからない」「ここでの生活に慣れることが大変」といった発言があり、生活リズムや人間関係を含めた生活環境の変化に適応することの困難さが語られていた。また、参加者が居住するサ高住は自立が主体であるため、「自立している分にはいいが、介護になったらどうするかっていうことになる」といった、身体機能の衰えによる入居継続

困難についての不安も語られていた。

更に、インタビュー参加者は、今後の生活について、周囲との関係性を良好に保ちながら、不安を感じながらも、できるだけ長く施設内で生活していきたいと考えていた。具体的には、「動けなくなるまではここに何とかお世話になりたい」「（最期まで）ここで終えられたらいいが、分からない」という発言があり、今後の生活に対して漠然とした不安を抱えながらも、今の穏やかな生活の延長を望む姿が見受けられた。

１０．その他

施設の老朽化や銀行の破綻など社会情勢の変化による今後の生活への影響を心配する意見や、漠然とした死に対する不安が語られていた。「じっとしていると、死との直面っていうのが一番怖い」「死を考え出したときに、どうなっちゃうんだろうて、1 人だから」「考えたら悪い方、悪い方ってなるので、考えないようにしている」というように、死に対して恐れを抱きながらも、「（死については）タブーみたいになっちゃってるけど、実際タブーじゃない」というように死を避けられないものとして見据えながら、日々の生活を送っていくことの必要性を語っていた。

（グライナー　智恵子）

居住者インタビュー調査概要（サ高住イ）

1．インタビュー参加者の概要

インタビュー参加者は5名で、男性1名、女性4名。介護度は自立が4名、要支援1が1名、居住年数は入居後数か月～3年であった。座談会実施時間は約2時間程度であった。

2．日頃の生活状況：食事

食事に関しては不満が多く、「あまりおいしくない」「もう少しいいものを出してほしい」といった味に関する不満、「献立に変化がない」「冷凍したものを温めるだけ」「歯の悪い方に合わせて作っていると思うが、我々は普通の食事ができるので、もう少しこちらの意見も聞いてほしい」といった献立に関する不満、「高い」という値段に関する不満が語られた。「食事だけは文句を言いたい」「文句を言い出したらきりがない」「みんな会うとその話」と食事に関する不満で盛り上がり、食事に関する不満はかなり大きいことがわかった。そのためか、食堂を利用している人は少なく、朝食と夕食で食堂を利用している人が1名、夕食のみ利用している人が1名、夕食のみ（献立によって）利用している人が2名、全く利用していない人が1名であった。食堂を利用しないときは、朝食は自炊、昼食は自炊か外食など、各人の生活スタイルに合わせて食事をとっていた。しかし、「おいしかったら外に行かない」「買ってきたお弁当のほうがおいしい」「食べることが楽しみだから」との声があり、施設での食事への不満から外食が増えていることがうかがえた。

3．日頃の生活状況：掃除

施設にも掃除を頼むこともできるが、インタビュー参加者は自身で実施していた。「毎日やっている」「スペースも小さいから楽」との声があり、自立している利用者にとって、自宅にいた時と同様に掃除を行うことは負担になっていないことがわかった。「女ですから、いくつになっても自分のお部屋の掃除とかはしたい。」という声もあり、これまで行っていた家事を継続して行うことで自立を維持しているという気持ちがあることが推測された。

4．日頃の生活状況：外出および趣味や活動を通しての地域との交流

多い方で週5日、少ない方でも週3日は外出していた。外出先としては、会社への通勤、子や孫や友人との食事会、買い物、サ高住に入る前の自宅など様々であった。サ高住に入る前の会社、家族、友人といった人間関係が維持継続されていると同時に、「○○町になじみの店ができたのでそちらに行く」という声があったように、サ高住のある新しい環境においても外出先が新規開拓され、生活になじんでいる様子が見られた。

また、利用者同士でお祭り、お花見、美術館、歌舞伎、コンサート等に行くなど、外出を楽しんでいる人も見られた。その際、「私は去年〇〇から来たので地図を見てもわからない」という居住者を、この近くに長く住んでいた居住者が案内するなど、居住者同士でサポートし合っている様子が語られた。

5．日頃の生活状況：運動

5名全員が、運動としてウォーキングを行っていた。ウォーキングの場所としては、サ高住の廊下と外出してのウォーキングが挙げられた。「1日5000歩は歩く。午前と午後と」「毎日ここから駅まで」「なるべく外に出て歩く」「やっぱり歩くのが1番」等と語られ、意識的にウォーキングを行っている様子が見られた。ウォーキング以外に自己流体操をしている人も1名いた。施設においても運動教室が開かれているが、「参加している人は少ない。数人」とのことであり、あまり利用されていないことがわかった。

6．日頃の生活状況：サ高住での活動への参加

女性は、編み物を編んで寄付をする「あみあみクラブ」への参加者が3名、1月に1回のフラワーアレンジメントへの参加者が2名おり、どちらの活動も常時6～8名くらいの参加者で活発に行っている様子が語られた。一方、男性については「男の人は何もやってないよね」「最初は麻雀クラブもやっていたが、集まりが悪くなって消えちゃった」と語られ、サ高住での活動に参加していないこと、参加する活動がない様子が見られた。男性は女性に比べ入居者も少なく、ネットワークを作るのが困難なことが推測された。

7．日々の生活状況：今後行いたいこと、望ましい活動

現在は自立して自由に外出できるため特に要望がないが、「これで外へ出られないで不満が出てくると精神的に参ってしまうと思う」と、外出ができなくなった場合の不安が語られた。そのような場合を想定して、歌う会やゲーム、安い車を斡旋しての観光やハイキングなど、足が悪くなっても楽しめる活動を望んでいた。現在も、石垣島へ数泊といった旅行は実施されているとのことだが、「それはちょっと無理」「私たちは勝手にバスツアーに行ったりしているが、行けない方がかわいそう」との声があり、外へ出られない方のために何かしてあげたらいいのではないか、との提案がなされた。

8．居住者やスタッフを含めた人との繋がりの再構築

居住者同士の繋がりについては、前述したあみあみクラブなど、サ高住の活動で仲良くなったとの声があった。一方、「顔を知っていても、名前がわからない方がいて、コミュニケーションとれない」「新しい人が入ったときは食堂に集まってスタッフから紹介があればいいけど、そういうのがない」という声もあり、サ

高住の活動に参加していない場合には他の居住者との繋がりが持ちにくいことがわかった。特に男性は「男の人はいない。話すのは一人くらい」と語るなど、居住者同士の繋がりの少なさが感じられた。スタッフについては「みんな良い方」「フレンドリー」と好評であった。朝食に食堂に来ない場合には希望の時間に安否確認に来てくれる、事務所の前を通る時に挨拶するなど、適度な距離感で良好な関係を築いている様子がうかがえた。

一方、入居前の人間関係に関しては、「友達は多い。数名と月に何回か会っている」「(入居前に住んでいた) マンションにいた方、よくご一緒しています」と、以前からの友人関係を維持継続できている人と、「友達が1人もいない。みんな亡くなった」「近所にいた人は、こちらに入居してから縁遠くなった」といった、以前からの人間関係が断絶してしまった人とに二分された。長く住んでいた地域から離れたサ高住に入居した場合、それまでの人間関係を失う危険性が高いことが示唆された。

9. 住まいのサ高住について
～居住決定から現在の生活・今後に対する思い～

サ高住に住むことに決めた理由は、家族の死によって独居になったからというもの、「自宅が階段なので、上り下りが不自由で」「狭心症で。家族にも心配かけるし」といった、健康上の悪化によるものが挙げられる一方で、「娘が、足が元気なうちに東京に来たら（観劇などに行けて楽しいから)、と言って」といった、サ高住での生活をポジティブに楽しむことを理由とした人もいた。入居先の決定については、1名以外は子どもや親族と一緒に見て回ったり、子どもの推薦を受けて決めていた。その際、「どうせなら老人ホームに入るって言ったけど、娘が、それは寝たきりになってからでいいと」「(他の候補もあったが車椅子の人が多く)老いは老いを呼ぶと言うことで、もう少し元気な人がいるところがいいんじゃないかと思って（ここに決めた)」と言った声があり、入居者の自立度の高さが選択の重要な要因になっていたことがうかがえた。

現在の生活については、「安心がある。何かのときに助けてくれる」といった安心面、「不満はない。自由だし、自宅と同じような生活をしている」といった自由度が高い面、「これだけ人がいるから、良い方にめぐり会えるということが幸せ」といった人間関係の面で、満足していることが語られた。一方で、「サービスが悪い。家賃は高い。食事は高くてまずい」「(医者に、病院についてきてもらいなさいと言われたが) 従業員が足りないからできないと言われ、冷たいと感じた。非常事態にすぱっと切られたのが心配」と言った不満の声も見られた。特に、食事に関しては不満が大きく、食事に対する不満が全般的な不満にまで波及している可能性が示唆された。

今後の生活については、前述のように、外出できなくなった場合の活動が語られた他、何かあったときにどうなるのか心配、応急処置をしているのを見ても自分たちでできるようなことしかしない（それを上回ったものがほしい)、家賃が

高くて年金ではやっていけない、といった将来に対する多方面にわたる不安が語られた。「今のところ自立しているので不満はないが、これから何が出てくるかわからない。できるだけ自立していかれるように頑張りたい」との声が代表するように、現状に不満はないながらも、自立を前提とした施設ということもあって、健康状態が悪化した場合の不安を抱えている入居者が多いことがわかった。

１０．その他

自宅に近い形での生活を特徴としたサ高住であり、インタビュー参加者も自立して健康であることに自負心を持ち、ウォーキングや掃除など、意識的に健康を保つための努力をしていることが推測された。また、風呂場で転ぶ人が多いということが語られ、自宅に近い生活ができるだけに、施設に入っていても自宅と同様の危険から免れないことが示唆された。また、食事に対する不満が多く語られたが、毎日の食事は大きな楽しみの１つであり、食事に対する満足度を上げることは重要であると考えられる。

（竹内　真純）

居住者インタビュー調査概要（サ高住ウ）

1．インタビュー参加者の概要

インタビュー参加者は年齢 70 歳～ 87 歳、介護度は要支援 2 ～要介護 4 であった。居住年数は数か月～ 3 年であった。座談会実施時間は約 2 時間程度であった。

2．日頃の生活状況：食事

ミニキッチンのついた部屋は 51 室中 5 部屋であり、ミニキッチンが付いてる部屋の住人も食事は 3 食食堂で摂っている。建物の食堂で食事は作られており、多少の不満が時にはあるが、基本的においしいという評価であった。食事の配膳は居住者自身が行っており、自立を促す仕掛けの一つでもあるということであった。

3．日頃の生活状況：外出および趣味や活動を通しての地域との交流

近くのコンビニや病院、また自宅に荷物を取りに行く近所の散歩に行くといった程度で、概して外出は少ないということが、本サ高住の特徴であった。外出しない要因として、建物内で用が足りてしまうということが挙げられていた。食事がおいしいとことなど、サ高住自体への満足度が高いことが外出を減らす要因ともなっていた。

本サ高住の建物は入り口に駄菓子屋を設置し、緑の豊かな庭もあり、エントランスは開放的な作りにするなど、地域の人たちも入りやすい工夫をしている。毎日ではないが、子どもたちが放課後遊びに来るなど、地域社会、世代間交流のきっかけを提供している。ただ、現時点では、積極的な居住高齢者と子どもたちの交流が行われているというわけではない。しかし、建物の中に子どもの声が聞こえ、姿が見えることは、居住者に歓迎されていた。

4．日頃の生活状況：運動

参加者のうち姉妹が 1 組あり、彼女たちは一緒に自室の中でゴムを使った体操をし、毎日散歩に出るなど、定期的に運動していた。本サ高住で唯一夫婦で居住している夫婦は、夫がやはり部屋で運動をしていた。彼は病気の後遺症で歩行が不自由な状態であったが、体操してリハビリに励んだ結果、今は歩いて食堂に来られるまで回復したということであった。

5．日頃の生活状況：サ高住での活動への参加

食事の際に多少の会話があるが、居住者内での交流が活発とは言えない状況であった。以前あったカラオケの再設置を望む声、また男性から飲み会を開催しようと仲間を募っている、趣味の集まりをしたらいいかもしれないなど、という発

言もあり、交流をしたいという気持ちはある。しかし、食堂で顔を合わせる際に声を掛けたほうがいいのか、声を掛けるには勇気がいる、という発言もあり、居住者間での自然発生的な交流に任せていては、なかなか進まない様子が明らかになった。

6．日々の生活状況：今後行いたいこと、望ましい活動

子どもたちにシャボン玉を用意したり、子どもとそのお母さんに紙芝居の読み聞かせをしている居住者もあり、子どもを通じて地域交流をもっと進めたい、或いはカラオケや趣味の会などを通じて、居住者間の交流を進めたい、という希望が強かった。今回インタビューに参加した居住者は、あまり外出に積極的ではなく、サ高住内での生活時間が長いため、カラオケや飲み会、趣味の会など、何か交流の機会の設定を望んでいた。

駄菓子屋や入りやすいオープンスペースの設置というサ高住側の建物の構造も念頭に入れた経営計画は、いいアイデアではあるが、企図したような交流の実現にはまだ時間がかかる。運営側のかなりのサポートが必要である。

7．スタッフとの繋がり

総じてスタッフとの関係には満足度が高かった。スタッフというより、親身になって世話をしてくれる家族や友人というような存在と思っている人も多かった。スタッフの質の高さを裏づけると同時に、居住者たちにスタッフ以外の人とのつながりが不足していることもうかがわせる。

8．本サ高住の特徴

本サ高住での特徴は3つある。第一には食事に対する満足度の高さである。サ高住内で作られている食事はかなりおいしいとの評価を受けており、自室で自炊する人はいなかった。二つには緑の多い庭の存在であり、居住者に癒しの空間を提供していた。三つには解放的なエントランス、駄菓子屋の設置により、地域の子どもが自由に訪れる空間となっていた。もう少し時間がたてば、地域との交流はさらに進むと期待される。

不満である点は、居住者間の交流の少なさである。食堂で会話をする機会があっても、それ以上の付き合いは、遠慮などもありなかなか進まないようであった。居住者たちはその希望を持ちながらも、みずから積極的に働きかけをすることには抵抗があるようであった。スタッフ側からの働きかけや、交流の仕組みを作ることが望まれる。

（片桐　恵子）

居住者インタビュー調査概要（サ高住エ）

1．インタビュー参加者の概要

インタビュー参加者は6名で、男性1名、女性5名、年齢は70歳代1名、80歳代4名、90歳代1名であった（範囲：74～91歳）。介護度は自立が2名、要支援Ⅰが2名、要支援Ⅱが1名、要介護Ⅰが1名であり、居住年数は4～5年が2名、3～4年が1名、2～3年が2名、1年未満1名であった（範囲：4か月～4年5か月）。本座談会実施時間は約2時間程度であった。

2．日頃の生活状況：食事

朝食	昼食	夕食	分類	備考
○	○	○	A群	8割食堂、2割外食
○	○	○		週に1回外食
○	×	○	B群	自炊あり（時々）
○	×	○		自炊あり（時々）
×	×	×	C群	自炊あり（全て）
×	×	×		全て外食か総菜

食堂で朝・昼・夕の3食を食べているのは2名（A群）、朝・夕のみ食堂利用は2名（B群）、全く食堂を利用していないのは2名（C群）という結果だった。A群は週に1-2回外食をして気晴らしをしている。また、B群は両名ともキッチン付き個室に居住しており、昼食は気分によって外食か自炊を選択している。C群は3食自炊派と総菜または外食派が1名ずつという結果になった。話の内容から、自炊を行う者は定期的な買い出しが必要であり、それが外出の機会となって気分転換につながっている様子が伺えた。また、老化によって以前は可能だった自炊が出来なくなっているという意見もあった。

食事の量や味付け・メニューに関しては、味の好みが合わない、生野菜やお刺身が出ない、栄養が足りないなど不満を示す者が多くいる一方、全く不満が無いという者も1名いた。ただし、総じて以前と較べると質が向上してきているという意見が多かった。

食事環境に対する不満点としては、A棟・B棟で時間が分かれており、食事中の入居者同士の交流が少ないため、食堂であるにも関わらず孤食化の傾向が見られる。その結果、食事の機会が楽しみにつながっていないという意見があった。

求める改善点としては、メニューのリクエスト制度や、居酒屋やカフェなどの設置といった意見が出た。

以上の点から、居住者は、個人的ニーズとしての食の豊かさとともに、居酒屋やカフェといった意見に象徴的な食を通じて交流できる場を求めていると感じた。

3．日頃の生活状況：掃除

普段の掃除については、息子の友人にやってもらっている男性を除いて、他の5名の女性は自分で実施していた。他に、居住者のなかにはサ高住の職員に有料でやってもらっている人がいるという意見が出た。お掃除サービスに要する費用は把握しておらず、人に頼むと高いというイメージを持っている方が多かった。介護保険サービスで利用可能と伝えると興味がある様子だった。これらの生活支援サービスについては、経済的な理由に加え、現状ある程度身の回りのことは自分でできる点から利用をためらっているが、手ごろな価格ならば利用したいという潜在的なニーズがあるのではと推察された。

4．日頃の生活状況：外出および趣味や活動を通しての地域との交流

ほぼ毎日外出する方が2名。一人は友人と一緒に遊びに行っている方で、もう一人は近所のスーパーに毎日の食事などを買い出しに行っている方であった。その他の方も、週に2－3日程度は趣味の活動や買い物等で外出している様子だった。

外出の理由としては、週2-3回のデイサービスの他に、趣味の活動（剣道、社交ダンス、フラダンス、習字、カラオケ、生涯学習など）が多く、地域のシルバーキャンパスに月2回通い、社会学や医学、健康、陶芸など幅広く学んでいる方もいた。一方、習い事の月謝負担を重荷に感じ、心ならず退会したケースも聞かれた。

地域との交流という意味では、地域のお祭りや大学のオープンキャンパス等の地域イベントに参加している方も多かった。また、地域とのつながりではないが、必ず週に一度息子と外食することを日課にしている方もいた。各々自分の関心のある分野で活動できる場所を見つけている一方で、他の地域から移住してきた方は、地元の地理に疎く迷子になると困るため、案内人がいない状況では決められたルート（駅前デパートとサ高住の往復）のみを行動範囲と定めているケースもあった。

その他にも、以前居住していた施設の友人に定期的に会いに行く方や、地元の友人を招いて案内する方がいるなど、居住場所が変わってもこれまでの交友関係が途切れないよう継続するための努力をしていることが伺えた。

5．日頃の生活状況：運動

剣道やマラソンを日課にしている大変活動的な方が一人いた。その他にも、社交ダンスやフラダンスなど、趣味の活動を通じて運動を行っている方が2名、週に1回ジムに通っている方が1名いた。天気の良い日はサ高住周辺の公園で運動や散歩を行っているという話だった。その際は近隣の幼稚園の子供達が可愛く、姿を見るのが楽しみになっている様子だった。

6．日頃の生活状況：サ高住での活動への参加

サ高住では、映画やコーラス、大人の教室（塗り絵や折り紙など）などのプログラムを提供している。不定期で居酒屋やカフェもあり入居者には好評の様子だった。また、サ高住のイベントの祭りにはほぼ全員が参加していた。それぞれが自分の興味のある活動に参加しているが、高齢で目が見えにくくなり、細かな作業が必要な講座への参加を諦めているといった声も聞かれた。

こうしたプログラムは好意的に受け止められている一方で、同じ施設内のイベントでも知らなかったという声もあり、周知方法に課題があると感じた。サ高住側では掲示板に張り紙をして告知しているようだが、それらを見ていない（見えない？）方も多く、サ高住内の知り合いから口コミで情報を手に入れている方もいた。食堂など多くの人が集まる場所にも掲示する、シニア目線を意識して文字を大きくする、チラシを目立つ色彩にする、シンプルな説明にするなどの対策が必要だと感じた。

7．日々の生活状況：今後行いたいこと、望ましい活動

サ高住内での活動として今後実践したいこととしては、ラウンジのような場所があれば居住者同士でもっと談話してみたいという意見に同調する声が多かった。特にB棟は構造がマンションに近く、同じフロアでも交流が少ないことを気にしている方がいた。また、食堂では一人で食べている方に声掛けしづらい雰囲気があるが、自分が飲めなくても居酒屋のような場所なら気軽におしゃべりもし易いということで、そういった場所をつくる必要性について話が弾んでいた。そうした話の流れの中で、料理が得意な人が居酒屋のメニューを作ればよいなどの意見も聞かれ、皆が出来ることを持ち寄り交流するための場所をサ高住内に創る必要性を共有できていた様子だった。

印象的だった事柄として、今回の座談会メンバーの中に他の居住者のことを非常に丁寧に観察し見守っている方がおり、同じフロアの人の名前は全て覚えていると豪語していた。その方の意見としては、日々のコミュニケーションが無いと人間はまともでなくなってしまう。年をとってくると急に性格が変わる人もいるため、そういう人とは普段から付き合っていないと変化に気づけないという話だった。そういった意味から、サ高住内でも普段からの人付き合いは非常に大事なことと認識し、率先して活動しているようだった。

以上の点から、サ高住に入居している方に共通してあてはまる事柄としては、もっと施設内で交流の場があると良いということであった。

8．居住者やスタッフを含めた人との繋がりの再構築

サ高住スタッフの居住者への対応については概ね満足度が高い印象を受けた。例えば、全体的にスタッフが優しいといった意見の他にも、朝のあいさつや食堂での声掛けに加え、食事の時間がいつもより遅くなった時は心配して様子を見

にきてくれるといった細やかな気遣いやさりげない見守りには大変感謝しているし、嬉しいという話があった。一方で、スタッフの入れ替わりや多忙によって外部のスタッフが入ってくることへの不安の声もあがった。また、入居当時はほとんどのスタッフが施設内で働いていたが、最近は他のサービスの関係で外に出る機会が増えており、それによってケアの質が低下することに対する懸念を抱いているようだった。一部の居住者の中には、サ高住を大家と捉えており、身の回りの生活支援や介護認定の相談などを行いたいが、心理的な距離感を感じて敬遠してしまっているといった意見もあった。

住まいがサ高住に変わったことで、戸建てに住んでいた時の様々な不安（大きな荷物が運べない、災害時の対応、家で倒れた時にどうしようなど）から解放されて安心できる住環境になったと語る方もいた。特に女性が独りで広い戸建てに住んでいると不安を感じる傾向が見られた。また、居住者の家族の視点では、高齢の親が戸建てやマンションで独居しているよりかは見守り機能があるサ高住の方が安心できるようだった。

全体的にサ高住への移住は好意的に受け止められており、これは施設のハード面・ソフト面に加え、運営スタッフの質による部分が大きいと推察される。スタッフと居住者の信頼関係の構築には成功しているが、居住者間の関係性の構築には改善すべき余地があり、今後は居住者の相互交流をスタッフがうまく間に入ることでサポート出来るような体制の整備を期待したい。

9．住まいのサ高住について
～居住決定から現在の生活・今後に対する思い～

サ高住に住むことに決めた理由は座談会参加者によって様々であった。サ高住に住むことに決めた理由として、妻や夫の死亡、高齢な親の独居を心配した子供が自分の近くで安心して住める場所を探した結果住むことになったという理由が語られた。また、万一の事態に対応できる見守り機能や食事サービスがあり、ある程度のプライバシーを保ちつつ自立した生活が送れるため、子供に迷惑をかけなくて済むといった理由もあるようだった。他にも、買い物に便利な立地や周辺の公園、眺望の良さといった環境的な要因に加え、クリニックや地域包括支援センターが併設されている利便性も理由としてあげられた。

以上のように、サ高住の生活に関しては、スタッフの丁寧で親切な応対や周囲の環境、緊急事態への対応や提供されるサービス内容も含め全体的に概ね満足している声が多く聞かれた。

不満な点に関しては、居住者の交流機会が少ないこと、食事の内容、一定のプライバシーが確保されているとは言え集団生活であるため、テレビや話し声の大きさやごみの出し方などの細かなことに気を遣う必要がある点や、洗濯機が古く数も少ないため更新して欲しいといった設備面での不満があがった。特に交流の面では、夫婦で入居して当初はコミュニケーションに不安を感じていなかったが、パートナーとの死別に伴い周囲の居住者とコミュニケーションをとる必要性を感

じているが、今まで意識してこなかった分、やり方が分からず苦労しているといった声も聞かれた。

サ高住はある程度自立した生活が送れることが前提となっているため、参加者の中には将来自分が病気になった時に最後までサ高住に住み続けられるか不安に感じている方もいた。また、自立できている分、介護保険制度に関する知識に乏しく、いざ自分がそういう状況に直面した時にどこに相談していいかわからないという方もいた。こういう方々に対しては、元気な内から介護保険制度や介護サービスに関する情報提供を行うことで、将来の不安を和らげてあげるような対応が必要なのかもしれないと感じた。

１０．その他

今回の座談会では交流がキーワードであった。交通アクセスが良いため他の地方からの入居者もいるが、今回の座談会をきっかけに同郷出身であることが判明し、故郷の話で盛り上がるといった場面が見られた。交流によって居住者間の新たな共通項が発見され、それに伴い新たな交友関係が構築され、結果的に本人の社会性に好影響を与える可能性があるなど、集団生活の中で他人を知り自分のことを知ってもらう交流は非常に重要な要素だと再認識させられた。

（渋川　勉）

＜２＞サービス付き高齢者向け住宅居住者側インタビューのまとめ

ここまで4か所のサ高住で実施した高齢者へのグループインタビューについて、サ高住毎の結果を見てきた。サ高住での生活には概ね満足されている居住者が多かったが、今後年を重ねる中での身体機能の衰えを意識し、現在の生活を維持できるか、サ高住へ住み続けることができるか不安を抱えている現状もあった。以下では、Eat（食べること）、Meet（人と会うこと、交流すること）、Treat（ケアや支援を受けること）の3つの観点から居住者のインタビュー結果を整理し直してみる。

○ Eat（食べること）

食事はインタビューを実施したサ高住すべてにおいて提供されていた。食堂の利用頻度は同じサ高住でも居住者により異なっていた。3食ほぼ毎日食堂を利用している方から、全く食堂を利用していない方までおり、本人の生活スタイルや食習慣に合わせて、自由に自炊や外食などと組み合わせながら食堂を利用している状況にあった。外食を選択する理由には、その日の気分であったり、食事に変化を求めるといった声が多かったが、あるサ高住では、食堂で提供される食事への不満から外食を選択せざるを得ないといった意見も述べられていた。また、自炊では定期的な買い出しが必要であることから、それ自体が外出の機会にもなり居住者の気分転換につながっていた。

提供される食事の内容については、「基本的においしい」という意見から、「みんな会うと食事に関する不満で盛り上がる」など、サ高住によってその満足度には大きな違いがみられた。また、同じサ高住の中でも、メニューや味付けなどについて、各居住者の好みにより満足度に違いが見られた。具体的要望としては、味付けの質の向上、変化に富んだメニューの提供（メニューのリクエスト制度）、手頃な価格設定、食事量や栄養バランスの調整などがあった。

食事環境については、食堂で他の居住者と交流を持ちたいと思っているがその機会が持てないこと、棟によって食事の時間が分かれているため居住者同士の交流が少ないことなどから、あまり食事の機会が楽しみにつながっていない状況にあった。

食事は居住者の毎日の楽しみのひとつでもあり、できるだけ居住者の希望を取り入れて工夫していくことが、居住者のQOL向上にもつながっていくと考えられた。

○ Meet（人と会うこと、交流すること）

多くの居住者が週2日以上は外出しており、ほぼ毎日外出される方も少なくなかった。しかし、外出する居住者の少ないサ高住もみられ、その理由として建物内で用事が済んでしまうことが挙げられていた。外出の理由は様々であるが、大

きくは仕事、趣味、買い物、家族や友人との交流、運動、ボランティアに関する内容であった。これらの外出の機会は、家族との交流はもちろんのこと、サ高住入居前の交友関係の継続にも深く関わっていた。以前の住まいが遠方であった居住者は、距離的な問題からこれまでの趣味や交友関係を継続することが難しい状況にあるが、できるだけこれまでの交友関係を継続できるように努力している様子もうかがえた。サ高住によっては利用者同士でお花見や美術館に行くなどのイベントを楽しんだり、遠方から新たに入所した方に近隣を案内するなど、居住者同士でサポートし合ったりする関係性もみられた。

地域との交流に関しては、設計時から地域との交流を視野に入れた構造でサ高住を建設するなど、地域との交流を意識的に行っているサ高住と、特に地域との交流を意識していないサ高住があった。積極的に地域との交流を促しているサ高住では、多くの居住者が地域のお祭りやイベントへ参加していた。また、開放的なエントランスや駄菓子屋を設置しているサ高住では、子ども達が放課後遊びに来るなど世代間交流のきっかけも提供していた。

各サ高住では、映画やコーラス、フラワーアレンジメント、塗り絵などの趣味の教室やサ高住のお祭り、収穫祭等が企画されており、それぞれが自分の好みに合わせて自由に参加していた。サ高住の中には、居住者が自発的に活動やイベント（カラオケや体操、オセロなど）を企画し実施している所もあった。しかし、これらの活動へ積極的に参加しているのは女性の居住者が多く、男性については参加できる活動の少なさや参加への消極的姿勢について語る居住者もあった。不定期で居酒屋やカフェを企画するサ高住もあり、居住者には好評であるが、このような企画の無いサ高住では、同様の企画を求める声が多く聞かれていた。また、居住者の多くが他の居住者との交流を深めたいという希望を持っていた。そのために、共通して語り合えるテーマでの座談会、読書会、勉強会の企画を求める声や、気軽に会話ができる場の設定、居住者が集えるラウンジのような場所の提供といった要望が語られていた。

○ Treat（ケアや支援を受けること）

スタッフとの関係性については、居住者の多くが満足されていた。日々のあいさつから、さりげない気遣いや見守りをして頂けること、対応は丁寧でフレンドリーであること、時には居住者の相談にも対応してもらえるといった状況であった。サ高住によっては親近感があり家族や友人のような存在と思っている居住者も少なくなかった。一方、なかには日常的にスタッフと会話を行う機会の少なく心理的距離感を抱いている居住者も存在していた。また、現在のスタッフとの関係性が良好である分、スタッフの入れ替わりや外部のスタッフが入ってくることへの不安や、そのことによるケアの質の低下を懸念する声も聞かれた。居住者は、互いに繋がりを築いていきたいと考えている方が多く、新しい方が入居された時に居住者全体へ紹介する機会を設けるなど、スタッフへその橋渡しを希望する声

も聞かれた。

要介護認定者を入居の条件としているのは1か所だけであり、多くの居住者は自立してサ高住での生活を送っていた。現在自立している居住者は一様に、介護が必要になった時にどうなるかという不安を抱えながら生活していた。自立を前提としているサ高住では、介護が必要な状態になった場合にどのような選択肢があるのか、どの程度まで入居が認められるのかなど、具体的な情報提供を行っていく必要性が示唆された。また、社会情勢の変化が今後の生活へ及ぼす影響を心配する声や、いつか訪れるであろう死への不安や恐怖を語る居住者もおり、このような自分の思いを居住者同士で語り合える場の設定も必要ではないかと考えられた。

以上、居住者のEat、Meet、Treatについてまとめてきたが、これ以外に語られた内容として着目すべき点に運動と社会貢献に関連する事柄が挙げられる。居住者の多くは意識的に身体を動かし健康を保つように努めていた。最も行われていた運動はウォーキングであり、他にジムやプールに通っている方、社交ダンスやフラダンスなど、趣味の活動を通して運動を行っている方などがいた。何れも身体機能の維持に積極的に取り組んでいる様子が伺えた。今後も適切な健康維持が行われるように、サ高住での健康に関連したサークル活動や運動教室の企画、そして地域包括支援センターが行う地域支援事業の情報提供など、居住者の選択肢を増やしていく工夫も大切であろう。

また、自立して生活している居住者は、ボランティア活動への積極的な参加を希望するなど、社会に貢献したいという思いを抱いている方が多かった。編み物を編んで寄付するといった活動を行っているサ高住もあることから、今後このような活動の輪が広がっていくことで、居住者の生きがいや生活満足度が向上していくと考えられる。そのためにも、社会福祉協議会との連携や、サ高住間で情報共有を行う、サ高住間での連携システムを構築するなどの取り組みが期待される。

（グライナー　智恵子）

第４章　活動支援の効果について

前章の居住者インタビューの結果からは、居住者の人たちが、住民同士の交流を望んでいる様子が明らかになった。居住人間の交流支援は現行のサ高住の制度では、必要とされている機能ではないが、住民らに切望されている様子が明らかになった。サ高住の居住者の平均年齢は80歳代半ばであり、住民による能動的な働きかけのみに期待するのは厳しいとも考えられる。そこで、本章では居住者間や地域社会との交流への、サ高住側からの働きかけが、居住者の健康に与える影響を検討することとした。

１．分析対象データ

一般財団法人高齢者住宅財団が厚生労働省から平成24年度老人保険健康増進等事業から委託を受けて実施した「サービス付き高齢者向け住宅の実態に関する調査」のデータの提供を受けた。調査実施が2012年であり、入居を開始してから年数が浅いものは除外したため、2010年以前に入居を開始したサ高住の回答分、348件を分析対象とした。

２．結果

＜１＞サービス付き高齢者向け住宅の特徴

母体となる法人の事業種別は図１の通りである。最も多かったのが介護サービス関連法人、次いで医療法人、NPO法人であった。

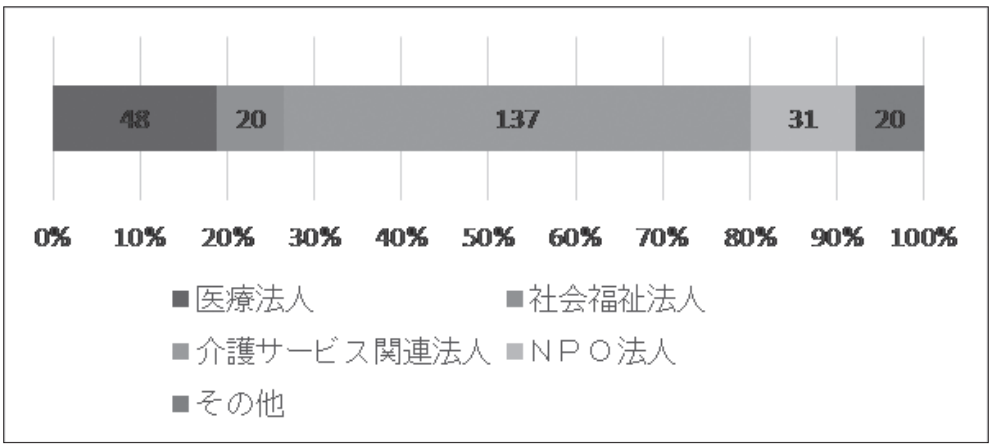

図１　母体となる法人の事業種別

また想定されていた入居者の所得階層は図２の通りである。中間所得層が78.8％と最も多かった。

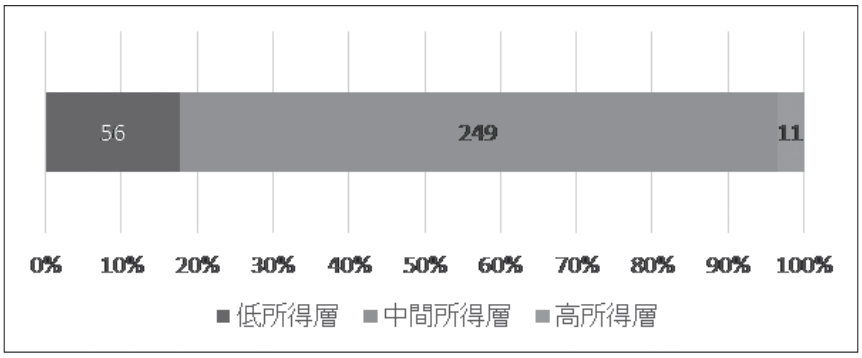

図２　想定されていた入居者の所得階層

想定されていた最低月額収入は　平均26.4万円、最大月額の平均は45.6万円であった。平成 30 年度の新規裁定者（67 歳以下）の年金額は、国民年金64,941 円、厚生年金（夫婦２人分の老齢基礎年金を含む標準的な年金額）221,277 円（厚生労働省，2018）であったことから、厚生年金に加えて、何らかの収入で補てんできる人が入居者として想定されていたことがわかる。

スタッフの特徴

職員については「住宅の職員として専従」が153か所（44.5％）、併設事業所との兼務が191か所（55.5％）であり、半数以上は兼務であった。兼務先についてまとめたものが表１である。訪問介護事業所との兼務が最も多くなっていた。

表１　兼務する業種

	N	%
訪問介護事業所	116	34.2
通所介護事業所	28	8.3
居宅介護支援事業所	10	2.9
小規模多機能型居宅介護事業所	10	2.9
訪問看護事業所	1	0.3
その他	17	5

職員の保有資格についてまとめたものが表２である。最も多いのがホームヘルパー、次いで介護福祉士であった。

表２　職員の保有資格（複数回答可）

ホームヘルパー	介護福祉士	ケアマネジャー	看護師	社会福祉士	その他	特になし
221	152	73	44	19	25	7
63.5%	43.7%	21.0%	12.6%	5.5%	7.2%	2.0%

日中の状況把握と生活相談サービスを行う日中職員の配置人員数は図３の通りであった。平均人数は3.1人（標準偏差3.1人）であった。

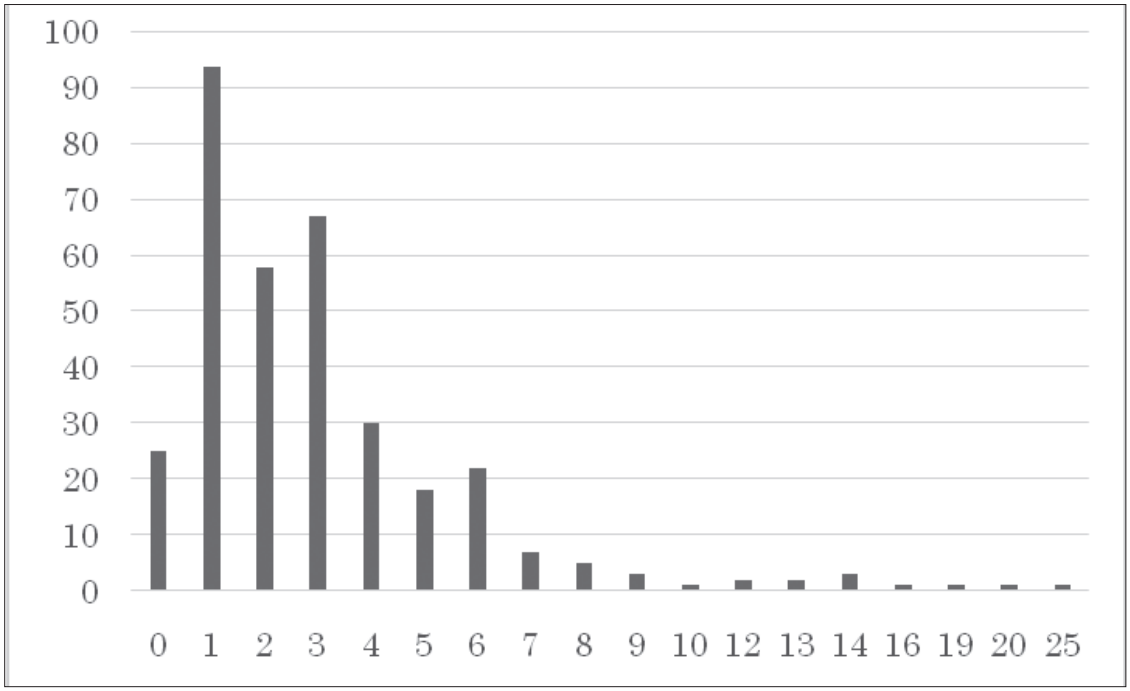

図３　日中の状況把握と生活相談サービスを行う日中職員の配置人員数

夜間職員の配置人数と勤務形態についてまとめたものが表３である。夜間の人員が全く存在しないサ高住が35.0％であった。

表３　夜間職員の配置人数と勤務形態

		夜間宿直		
		0名	１名	２名
夜勤人数	０名	71 35.0%	34 16.7%	2 1.0%
	１名	38 18.7%	29 14.3%	1 0.5%
	２名	17 8.4%	4 2.0%	3 1.5%
	３名	2 1.0%	1 0.5%	0 0.0%
	４名	0 0.0%	1 0.5%	0 0.0%

状況把握を行う方法については、居室への訪問が最も多く、次に緊急通報コール（押ボタンなどの能動的方法）であった（表４）。

表４　状況把握実施方法 (複数回答)

居室への訪問	生活リズムセンサー	緊急通報コール	間接的方法	喫食	その他
271	44	270	176	262	13
77.9%	12.6%	77.6%	50.6%	75.3%	3.7%

また随時の相談や問い合わせ以外に定期的な面談を行うことで入居者の状況把握を行っていたサ高住は219カ所（64.8％）、行っていないところが119か所（35.2％）であった。

その相談内容について多い割合からまとめたものが表５である。介護や医療、日常生活の相談が６～７割と最も多かったが、次いで、他の入居者との人間関係が４割、家族・親族との人間関係が２割であった。他の入居者との人間関係の相談が４割にのぼることは、単に居住者間の交流を促進すればいいものではないということを示唆している。

表５　相談内容 (複数回答)

介護	248	71.1%
医療	226	64.8%
日常生活	219	62.8%
他の入居者との人間関係	139	39.8%
家族・親族との人間関係	67	19.2%
住戸内の設備等	44	12.6%
行政サービス	41	11.7%
近隣地域の情報	24	6.9%
成年後見制度	20	5.7%
家計や資産	14	4.0%
転居前に住んでいた住宅	11	3.2%
その他	4	1.1%
特になし	5	1.4%

調査実施前の一か月間で、受けた相談内容の繋ぎ先として挙げられて先は最も多いのがケアマネージャーであった (表 6)。

表６　相談を受けた内容の繋ぎ先（複数回答）

ケアマネジャー	274	78.7%
家族	230	66.1%
医療機関	198	56.9%
介護事業者	160	46.0%
地域包括支援センター	78	22.4%
行政	52	14.9%
近隣の商店	18	5.2%
地域のボランティア活動グループ	11	3.2%
社会福祉協議会	8	2.3%
その他	16	4.6%
特になし	10	2.9%

他の入居者との人間関係について問い合わせを受けた 139 ケースの場合の繋ぎ先を多い順にまとめたものが表 7 である。

表７　他の入居者との人間関係について問い合わせを受けた場合の相談の繋ぎ先

ケアマネジャー	110	79.1%
家族	97	69.8%
医療機関	82	59.0%
介護事業者	64	46.0%
地域包括支援センター	38	27.3%
行政	23	16.5%
近隣の商店	7	5.0%
その他	6	4.3%
社会福祉協議会	2	1.4%
地域のボランティア活動グループ	2	1.4%
特になし	3	2.2%

次に実施している生活支援サービスと、そのサービスを行うにあたり入居者自身の自立を促すようなサービス提供上の工夫をしていたものについてまとめたものが表８である。実施していたサ高住の数自体はそれほど多くないが、介護予防を目的とした運動教室等と栄養指導や料理教室、入居者による調理の支援については、入居者の自立を促す工夫がされているものが多かった。

表８　実施している生活支援サービス（複数回答）とそのうち自立支援の工夫を行っていたもの

	実施していたサ高住数		自立支援	
通院への付添	225	64.7%	109	48.4%
ゴミ出し	195	56.0%	101	51.8%
買い物の代行	191	54.9%	100	52.4%
通院以外の個別の外出	179	51.4%	94	52.5%
洗濯サービス	162	46.6%	77	47.5%
清掃代行	161	46.3%	75	46.6%
金銭の管理	145	41.7%	58	40.0%
介護予防を目的とした運動教室等	61	17.5%	42	68.9%
入居者による調理の支援	35	10.1%	24	68.6%
栄養指導や料理教室	9	2.6%	9	100.0%
その他	49	14.1%	25	51.0%

何種類の生活支援サービスを提供していたかについてまとめたものが図４である。平均４.１種類（標準偏差２.４）であり、サ高住によって、提供している種類数に大きな差が見られた。

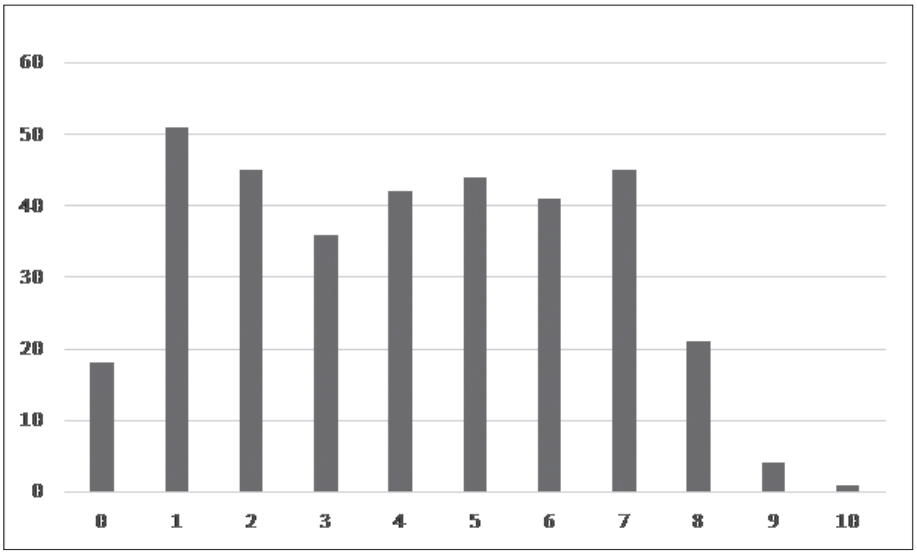

図４　提供している生活支援サービスの種類数

サ高住で提供しなければならないサービスである状況把握及び生活相談サービスの他に、入居者間同士のコミュニティ形成のための支援はどのようなものが行われているのだろうか。

最も多く行われているのはイベント行事の実施で７割のサ高住で行われていた。カフェ等の交流スペースの設置、定期的なサークル活動の支援が３割強と続く。

表９　入居者間同士のコミュニティ形成のための支援（複数回答）

イベントや行事の実施	250	71.8%
カフェ等の交流スペースの設置	125	35.9%
定期的なサークル活動等の支援	108	31.0%
その他	21	6.0%

図５は実施されている入居者間同士のコミュニティ形成のための支援の種類数を示している。全く行っていないのは69か所（19.8%）で８割のサ高住では何らかの取り組みが実施されていた。

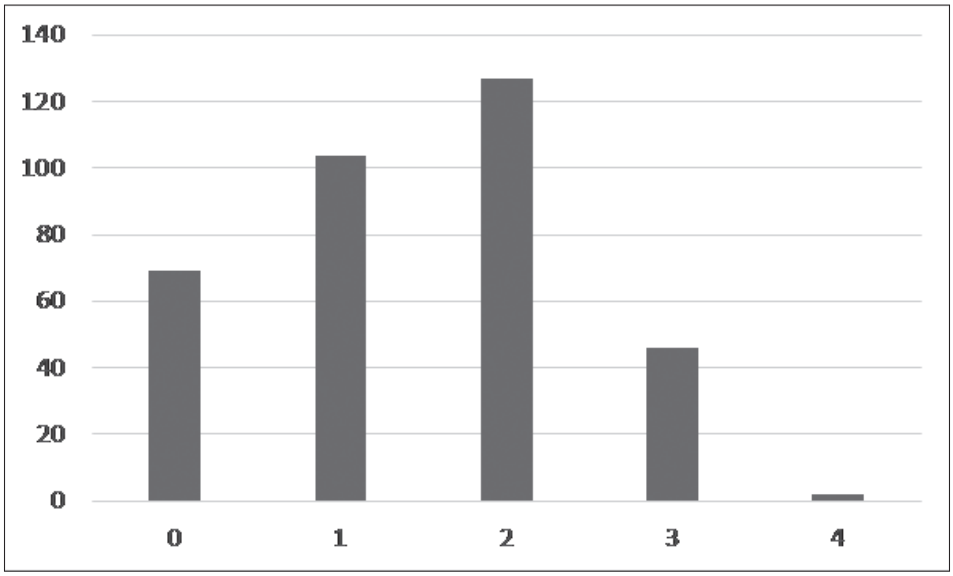

図５　実施されている入居者間同士のコミュニティ形成のための支援の種類数

では近隣住民とのコミュニティ形成のための支援はどのようなものがおこなわれているだろうか。地域のボランティアの受け入れ、地域の行事や活動に関する積極的な提供、近隣住民との交流イベントや行事の積極的な支援と続く（表10）。また特に行っていないとの回答は94か所（26.1%）であった。

表10　近隣住民とのコミュニティ形成のための支援 (複数回答)

地域のボランティアの積極的な受け入れ	148	42.5%
地域の行事・活動に関する情報の積極的な提供	141	40.5%
近隣住民との交流イベントや行事の実施・支援	124	35.6%
地域行事への積極的な参加	76	21.8%
地域を開放したスペース・イベント等の常設的な運営	32	9.2%
その他	9	2.6%

では近隣住民とのコミュニティ形成のための支援として行っている支援の種類数はどうだろうか。図6にその分布が表されている。平均は1.5(標準偏差1.3) であり、3/4のサ高住では、1種類から2種類の支援がおこなわれているようである。

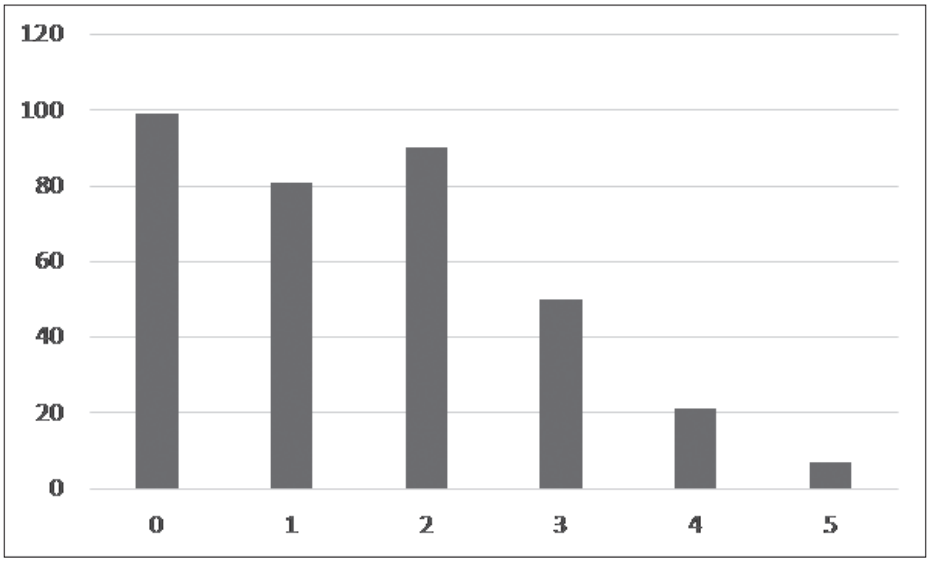

図６実施されている近隣住民とのコミュニティ形成のための支援種類数

＜２＞入居者の特徴

入居者の基本属性

入居者の平均年齢は 82.7（標準偏差 3.7）であった。

健康程度はどうであろうか。回答のあった 301 のサ高住のうち、入居者の中での自立から要介護 5 までの入居者がいるサ高住の数は表 12 の通りであった。これをみると要介護 1 と要介護 2 の入居者が 9 割程度を占めていた。

表 12　自立・要支援・要介護の入居者のいるサ高住数

自立	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	把握なし
127	109	91	37	25	61	82	137	260
57.8%	63.8%	69.8%	87.7%	91.7%	79.7%	72.8%	54.5%	13.6%

何らかの医療を受けている入居者のいるサ高住の割合は 327 のうち、180 か所（55.0％）であった。その内容は表 13 の通りであった。

表 13　要医療者のいるサ高住数と医療の内容

喀痰吸引	経管栄養	人工透析	点滴	膀胱カテーテル	酸素療法	疼痛管理
31	49	72	16	71	91	21
9.5%	15.0%	22.0%	4.9%	21.7%	27.8%	6.4%

次に入居者の入居動機についてみてみよう（表 14）。「介護が必要、或いは必要になったときに備えて」という回答は 97.4％であり、「介護に伴う不安のため」という理由が最も多かった。次いで「一人暮らしが不安になった」が最も多く 9 割弱の人の入居動機になっていた。「食事の提供」、「家事が負担」、「自宅の管理が大変」という、これまで通りの日常生活が営めなくなったためという動機も 87.4％であり、介護、一人暮らし、日常生活不安という 3 つが主な入居動機といえよう。

表 14　サ高住に入居した動機 (複数回答)

	N	%
1人暮らしが不安になったため	308	88.5
介護が必要になったため	239	68.7
食事の提供があるから	170	48.9
介護が必要になった時に備えて	100	28.7
家事が負担になったため	69	19.8
自宅の管理が大変になったため	65	18.7
バリアフリー化されているから	34	9.8
セキュリティ面の安心から	30	8.6
その他	30	318

＜３＞健康の増進にプラスの影響がある要因の検討

最後に、高齢者がサ高住に入居して、健康状態の維持・改善に資する施策は何かを検討した。

入居者中の自立者割合を従属変数として、入居者平均年齢、医療を必要とする人数、コミュニティ形成支援種類数、近隣交流支援種類数を独立変数として、重回帰分析を行った（表 15）。

表 15　入居者中の自立者割合を従属変数とした重回帰分析（N = 293）

	標準誤差	β	
定数	0.262		***
入居者平均年齢	0.003	−0.183	***
医療人数	0.003	−0.177	**
コミュニティ形成支援	0.014	0.245	***
近隣交流支援	0.010	−0.033	
R^2	0.109		

注.　＊p＜.05, ** p＜.01, *** p＜.001

入居者の平均年齢が高いほど、医療を要する入居者数が多いほど、自立割合は

有意に低くなっていた。逆に自立割合を高めていたのは、入居者間のコミュニティ形成支援の数であり、居住者間での交流を支援し、活発なコミュニケーションを図ることが最も自立支援に繋がっていた。

では、どういうサ高住がコミュニティ支援に積極的なのだろうか。1つにはスタッフ人員の余裕があれば、可能と考えられる。しかし、スタッフ一人当たりの入居者人数と、コミュニティ支援の種類数には相関関係がみられなかった。つまり、スタッフの人数の問題というよりは、質の問題、入居間にトラブルを生じさせることなく有効な交流策を講じることのできる経験豊かなスタッフの存在が大きいのかもしれない。更なる検討が必要である。

＜参考資料＞

厚生労働省　ニュースリリース　2018.1.26
https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12502000-Nenkinkyoku-Nenkinka/0000192296.pdf

（片桐　恵子）

第５章　まとめと提言

ひとつの事例がある。技術者として仕事一筋に生きてきた80代男性のAさんが配偶者を失い、一人暮らしとなった。みるみるうちに痩せていき、父親のことを心配して息子が訪ねると歩行が困難なほど弱っていた。驚いた息子が手配して有料老人ホームに入所した。一か月たった頃に、父上が無断で外出されるので困っているとホームから息子に電話があった。訊いてみると、ホームのバランスのとれた食事で体重は元に戻り、元気になったので秋葉原に部品を買いに行って新しい装置をつくっているだけ、身体の調子はよいので心配無用とのこと。その後、Aさんは、誰にも相談せず、近くの不動産店舗に出向いてアパートを契約、老人ホームを解約して引っ越した。老人ホームは何かと制約が多い、ぬり絵や折り紙などのアクティビティには全く興味がなく閉口とのこと。再び一人暮らしとなり、程なくまた前回と同様に歩けないほど弱ったので、息子が地域包括ケアセンターで相談してサ高住に入った。

サ高住での生活は快適で、一か月後に訪ねると顔色がよく笑顔が多くなっていた。食堂で3食必ず食事をしているとのこと、食堂で隣に座っていた人がスマホの操作がうまくいかず困っていたので、ちょっと手助けしたのがきっかけで、器械で困ったらAさんに訊けば教えてくれる、直してくれると評判になり、生来、無口で社交的な性格ではなかったが、皆から頼られ、感謝される「エンジニア」になった。引き続き秋葉原には頻繁に出かけるし、一人旅をしたり、自宅にいた頃とあまり変わらない生活が続いた。

2年後に持病の心臓病が悪化し、定期的に訪問診療を受けるようになった。食堂まで歩いていけない時にはスタッフに食事を運んでもらった。ある日、朝の点検では変わりなかったが、夕方、応答がなかったのでスタッフが訪れると自室のベッドで亡くなっていた。「親父は最期まで自分らしく生きた。幸せだったと思う。」と息子は葬儀で述べた。

人生100年と言われる時代となり、75歳以上の人口が急増している。2030年には全人口の2割が75歳以上になると予測されている。同時に高齢者の単身世帯が増えている。したがってAさんの事例は他人事ではない。介護は必要ないが一人暮らしは難しい、不安という人は多くなる。そういう人たちにとって、必要なサービスが付いた賃貸集合住宅での自由な生活は住まいの望ましいオプションであろう。

必要なサービスとは典型的には、Eat（食べる），Meet（交流），Treat（医療）である。Aさんの事例でも明らかなように、食べることは健康に直ちに影響する。調理の経験のない（多くの場合は）男性が配偶者に先立たれると忽ち食生活が大きく乱れる。家族のために毎日食事をつくってきた主婦も高齢になって一人暮らしになると、買い物や後片付けも含めて食事をつくる体力がない、自分のためだけに料理する気にならないと菓子パンを食事がわりにするようになる。

Eat のサービスニーズは大きい。

フレイル（虚弱）予防のデータが蓄積され、危険要因が明らかになってきた。フレイル予防には、栄養、運動、交流が重要であると言われているが、元気な高齢者が虚弱になる過程を追跡調査すると、まず人との交流から減退することがわかった。人との付き合いが少なくなると、それに続いてドミノ現象のように運動と食生活にも乱れが現われる。交流や社会参加がフレイルの防波堤になっているのだ。人間は社会的動物であり、社会関係の健康への影響に関する研究は多く、その重要性がクローズアップされている。単身世帯の増加に加えて、全世代を通じて人間関係の希薄化が進み、近年、「孤独」が大きな問題となっている。国際的にも深刻な課題で、英国では孤独担当大臣を任命して国策として孤独防止に取り組んでいるが、有効な解決策はなかなか見つからない。高齢になって、たまたま同じ建物に住むことになった人たちに人付き合いや社会活動を支援するするMeet（交流）の方策は容易ではないが極めて重要である。

高齢者の一番の不安は健康問題である。健康を損ねた時に適切な医療や介護サービスを受けることができるか。まして単身の場合は不安が大きい。医療・介護サービスを受けながら住み続けられる体制が整っていれば安心して暮らせる。最期までサ高住で暮らせるのか、Treat（医療）は最大の関心事である。このように、Eat, Meet, Treat という基本的要件を満たす住まいが超高齢社会においては求められている。

3つの要件を念頭に今回の調査結果を振り返えると、Eat とTreatに関するサービスは訪問したすべてのサ高住で提供されていた。インタビューではサ高住に居住してよかったこととして炊事から解放された、食べることを心配しないでよくなったことを多くの人が挙げた。食事の満足度は高いところも低いところもあった。低い施設では、食事の質に対する不満がサ高住全般への不満に波及しており、食が居住者のQOL（生活の質）に強く影響していることを再確認した。居住者の意見も参考にして、食事が楽しみになる暮らしを提供することが望まれる。医療・介護に関しては、一様に外付けのサービスであるが、認知能力が低下して自分で意思決定できなくなれば居住不可のところもあれば、最期まで医療、介護サービスを受けられるところもあり、内容はさまざまであった。訪問したサ高住ではいずれも医療・介護サービス提供者は居住者が選択できる方式になっており、実際に入居前から継続したケアマネジャーやかかりつけ医が訪問しているケースもあった。

一方、今回は比較的優良な施設を訪問調査対象としたが、そうしたところでもMeetは国が設けたサ高住の登録基準のひとつである安否確認と生活相談サービスに留まっており、居住者を繋いでコミュニティをつくる、周辺地域の住民との交流機会の創出までは手がまわらないというのが実状であった。原則的には自立した高齢者のためのサ高住なので、個々の居住者の主体性を尊重し、人付き合いも含めて生活への介入は最小限にとどめるという明確な方針をもつところもあっ

た。しかし、平均年齢が80歳を超える居住者にとって人との繋がりをつくることが容易でないことはインタビューでも再々話題になった。新しい入居者があっても紹介されないので、未だに名前もわからない、声をかけるのを躊躇うといった声が多く聞かれ、居住者間の自然発生的な交流にまかせておいては、なかなか進まないようであった。ほとんどの居住者は終日をサ高住内で過ごすので、居酒屋やカフェ、カラオケ、趣味の会、読書会があればよいという声が多く聞かれた。居住者たちはこうした交流の希望をもちながらも、食堂やラウンジのようなスペースを設けるだけでは自発的に繋がりをつくるには至らず、スタッフの働きかけを必要としている。また、ボランティア活動など社会に貢献したいと願っている元気な居住者も多く、こうした機会の創出が望まれる。海外の類似のシニア住宅では、食事、植栽、図書室、買い物バスなどの委員会を組織し、居住者がボランティアで参加しているところもある。居住者の身体機能、認知機能、仕事経験は多様である。各自が無理のない範囲で働いて少額でも収入を得る仕事の機会があればなおよい。役に立っているという意識は体も心も元気にする。限られた財源とマンパワーのもとでは、交流・社会参加支援の仕掛けづくりの研修を受けた専門スタッフが複数のサ高住をかけもちで総合企画と仕組みをつくって、常勤スタッフと連携して社会参加の場づくりにあたるのが効率的であり効果的であるように思われる。

今回、訪問したサ高住は、制度の理念に沿った入居者基準の採用と運営を行っている優良サ高住であった。いずれでも居住者の満足度は高かった。しかし、残念ながら大半のサ高住では利益優先の運営がなされている。自立した居住者が多いと利益が小さいという理由で、重度の介護を必要とする高齢者を優先的に受け入れ、外付けサービスと連携して利益をあげるサ高住が多いのは事実である。今後、75歳以上の単身者が急増するが、自立できる人、多少の支援があれば独りで生活できる人は多く、安心できる環境で自らの意思で生活をマネージして暮らすことのできるサ高住は極めて魅力的な住まいのオプションとなる。本来の理念に沿ったサ高住の実践モデルと経営モデルの構築が望まれる。

（秋山　弘子）

損保ジャパン日本興亜福祉財団叢書　No.94
「ジェロントロジー研究会」報告書

発行日　２０１９年８月９日
発行者　公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団
〒160－8338 東京都新宿区西新宿１－２６－１
電　話　03-3349-9570　　ＦＡＸ　03-5322-5257
URL　https://www.sjnkwf.org/
Email　office@sjnkwf.org